

加古川市

大塚遺跡

-（都）尾上小野線都市計画道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



平成28(2016)年3月

兵庫県教育委員会

加古川市

大塚遺跡

—（都）尾上小野線都市計画道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 28（2016）年 3月

兵庫県教育委員会

例　　言

- 1 本書は、兵庫県加古川市野口町良野に所在する、大塚遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、（都）尾上小野線都市計画道路事業に伴うもので、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部を調査機関として、平成 23・24（2011・2012）年度に実施した。また整理事業は、同事務所の委託により、平成 27（2015）年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。
- 3 調査の推移
(発掘作業)

試掘調査	平成 23 年 4 月 12 日	実施機関：兵庫県立考古博物館
試掘調査	平成 24 年 7 月 19 日	実施機関：兵庫県立考古博物館
本発掘調査	平成 23 年 8 月 17 日～平成 23 年 10 月 17 日	実施機関：兵庫県立考古博物館 工事請負：株式会社 加古川組
本発掘調査	平成 25 年 1 月 24 日～平成 25 年 3 月 8 日	実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 工事請負：株式会社 加古川組
(出土品整理作業)	平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日	実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、（公益）兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部久保弘幸が担当した。
- 5 出土した遺物および作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 遺構面の基本図化（1/50）は写真測量によっておこない、（株）ジオテクノ関西（平成 23 年度）、伸栄開発（株）（平成 24 年度）に委託して実施した。
- 7 本書中の図で示した方位は、調査地点における座標北による。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 8 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、青木哲哉（立命館大学）よりご指導を頂戴し、本書に玉稿を頂戴した。記して謝意を表したい。
- 9 放射性炭素年代測定は（株）加速器分析研究所に委託して実施し、その成果は本書に取録している。
- 10 本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新

版標準土色帖』によっている。

11 掃図中で用いた遺構の略称は次のとおりである。

SP：柱穴 SK：土坑 SD：溝

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査の概要	5
第3節 整理事業の概要	7

第3章 造構と遺物

第1節 本発掘調査区の層序と造構面の位置	9
第2節 造構と遺物	12

第4章 自然科学的分析

大塚遺跡の地形環境（青木哲哉）	38
-----------------------	----

第5章 結語	46
--------------	----

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 大塚遺跡と周辺の遺跡	3
第3図 調査区位置図	6
第4図 遺跡の位置	9
第5図 調査区全体図	10
第6図 2011年度調査 1区北壁断面図	11
第7図 2011年度調査 2区北壁断面図	11
第8図 2011年度調査 1区平面図	13
第9図 SD1～SD6 断面図	14
第10図 SD9・SD10・SD16 断面図	16
第11図 SD3・SD15～SD20 断面図	17

第12図	2011年度調査 1区出土遺物	18
第13図	SK7・SK8・SK11～SK14断面図	19
第14図	2011年度調査 1区出土石器	21
第15図	2011年度調査 2区平面図	22
第16図	SB1平面図・断面図	23
第17図	SD8・SD9断面図 SD9遺物出土状況図	24
第18図	2011年度調査 2区出土遺物	24
第19図	SD1・SD3・SD5・SD7・SD40・SD41断面図	26
第20図	SK2・SK42平面図・断面図	27
第21図	深堀トレンチ1・深堀トレンチ2断面図	28
第22図	2012年度調査 1区平面図	30
第23図	SD1～SD5断面図	31
第24図	SD7・SD8・SD10断面図	32
第25図	2012年度調査 1区出土遺物	32
第26図	2012年度調査 2区平面図	34
第27図	SD1～SD5断面図	35
第28図	2012年度調査 2区出土遺物	36
第29図	調査区周辺の地形分類図	39
第30図	調査区付近における微地形の分布	41
第31図	2011年度調査 2区の地質断面図	42
第32図	2011年度調査 1区のトレンチ断面図	43

表 目 次

第1表	大塚遺跡調査一覧	5
第2表	収録遺物一覧	47

写 真 図 版 目 次

写真図版1	大塚遺跡全景（上空から）	1区 SD1北壁断面（南から）
写真図版2	調査区遠景（南から）	1区 SD1断面（南から）
	調査区遠景（北から）	1区 SD2断面（南から）
写真図版3	2011年度 調査区全景（南から）	写真図版6 1区 SD2・3北壁断面（南から）
	2012年度 調査区全景（北から）	1区 SD2・3共有断面D-D'（南から）
写真図版4	2011年度調査 1区全景（北から）	1区 SD3断面（南から）
	2011年度調査 1区全景（南から）	1区 SD4断面E-E'（南から）
写真図版5	2011年度調査 1区全景（北から）	1区 SD4断面F-F'（南から）
	1区 北壁断面（南西から）	1区 SD4北壁断面（南から）

1区	SD5 断面 G - G' (東から)	2区	SP15 断面 (北から)
1区	SD9・16 共有断面 J - J' (南から)	2区	SP16 断面 (北から)
写真図版7	1区 SD9・16 共有断面 J - J' (南から)	2区	SP17 断面 (北から)
	1区 SD9 断面 I - I' (南から)	2区	SP18 断面 (北から)
	1区 SD10 断面 K - K' (南から)	写真図版13	2区 SP19 断面 (北から)
	1区 SD10 断面 M - M' (南から)	2区	SP20 断面 (北から)
	1区 SD10 上層炭化物集中検出状況 (西から)	2区	SP20 磁板 (北から)
	1区 SD15 断面 O - O' (南から)	2区	SP21 断面 (北から)
	1区 SD16 断面 P - P' (南から)	2区	SP22 断面 (南から)
	1区 SD16 断面 Q - Q' (南から)	2区	SP23 断面 (南から)
写真図版8	1区 SD16 断面 S - S' (南から)	2区	SP24 断面 (南から)
	1区 SD16 断面 R - R' (南から)	写真図版14	2区 SP26 断面 (南から)
	1区 SD3・17 共有断面 T - T' (南から)	2区	SP27 断面 (南から)
	1区 SD18 断面 V - V' (南から)	2区	SP28 柱根 (南から)
	1区 SD18 断面 U - U' (南から)	2区	SP29 断面 (南から)
	1区 SD18 西壁断面 (東から)	2区	SP30 断面 (南から)
	1区 SD18 断面 (南から)	2区	SP31 断面 (南から)
	1区 SD19 断面 W - W' (南西から)	2区	SP31 内の縫 (南から)
写真図版9	1区 SD19 断面 X - X' (北から)	写真図版15	2区 SP32 磁板 (南から)
	1区 SD20 断面 Y - Y' (西から)	2区	SP33 断面 (南から)
	1区 SK7 断面 (東から)	2区	SP34 断面 (南から)
	1区 SK8 断面 (南から)	2区	SP35 断面 (南から)
	1区 SK11 断面 (南東から)	2区	SP36 断面 (南から)
	1区 SK12 断面 (南から)	2区	SP37 断面 (南から)
	1区 SK13 断面 (南から)	2区	SP38 断面 (南から)
	1区 SK14 断面 (南から)	2区	SP38 内の縫 (南から)
写真図版10	2011 年度調査 2区全景 (南から)	写真図版16	2区 SP39 断面 (南から)
	2011 年度調査 2区全景 (北から)	2区	SD1 断面 C - C' (南から)
写真図版11	2区掘立柱建物跡 (東から)	2区	SD1・3 共有断面 D - D' (南西から)
	2区掘立柱建物跡 (南から)	2区	SD1 南半 (北東から)
	SD9 土器出土状況 (東から)	2区	SD5 断面 F - F' (南から)
写真図版12	2区 SP11 断面 (北から)	2区	SD5 断面 (南から)
	2区 SP12 断面 (北から)	2区	SD7 断面 G - G' (南から)
	2区 SP13 断面 (北から)	2区	SD7 断面 (南から)
	2区 SP14 断面 (北から)		

写真図版 17	2区 SD8断面 A - A' (東から) 2区 SD9断面 (東から) 2区 SD40断面 H - H' (南から) 2区 SD41断面 I - I' (南から) 2区 SK2断面 (東から) 2区 SK42断面 (西から)	2区 SD4・5断面 G - G' (北から) 2区 調査区西壁 (北から) 2区 調査区南壁 (北から) 2区 調査区北壁 (南から)
写真図版 18	1区 深堀トレンチ全景 (北から) 1区 深堀トレンチ断面 (西から) 1区 深堀トレンチ断面 (西から)	2011年度調査区 調査前状況 (南から) 2012年度調査区 調査前状況 (北から)
写真図版 19	2区 深堀トレンチ全景 (北から) 2区 深堀トレンチ断面 (東から) 青木哲哉氏調査状況	2011年度調査区 調査状況 2012年度調査区 調査状況 2011年度調査区 固化作業状況 2012年度調査区 調査状況
写真図版 20	2012年度調査 1区全景 (北から) 2012年度調査 1区全景 (北から)	写真図版 26 出土土器 (1) 写真図版 27 出土土器 (2)
写真図版 21	1区 SD1～3 (北から) 1区 SD7～10 (北から) 1区 SD1断面 A - A' (北から) 1区 SD2断面 (北から) 1区 SD3断面 C - C' (南から) 1区 SD4断面 D - D' (北から) 1区 SD5断面 (北から) 1区 SD5断面 F - F' (北から)	写真図版 28 出土土器 (3) 写真図版 29 出土土器 (4)
写真図版 22	1区 SD6断面 (北から) 1区 調査区東壁 (北西から) 1区 調査区南壁 (東から) 2区 SD1～5 (南から) 2区 SD1～5 (北から) 2区 SD1～5 (北から) 2区 SD2断面 B - B' SD1断面 A - A' (北から) 2区 SD3西壁 (北から)	
写真図版 23	2012年度調査 2区全景 (南から) 2012年度調査 2区全景 (北から)	
写真図版 24	2区 SD2断面 C - C' (北から) 2区 SD3断面 D - D' (北から) 2区 SD3断面 E - E' (北から) 2区 SD4・5断面 F - F' (北から)	

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大塚遺跡が所在する加古川市は、兵庫県の播磨地方の中央部に位置し、北は加西市・小野市・三木市、西は姫路市・高砂市、東は加古郡播磨町・稻美町にそれぞれ接している。

丹波山地北部の粟鹿山麓に発する加古川は、南流して瀬野町に至り、台地が広がる北播磨の中央を流下する。さらに加古川市と三木市の境界付近では、東西から山地が迫る狭隘な部分を抜けて、下流域は加古川市域を貫いて瀬戸内海に注ぐ。総延長 96 km、流域面積は 1,730 km² を測る県下最大の河川である。加古川市域では広い沖積平野を形成しており、流域は田園地帯として利用されてきたが、近年は播磨地域の中核的都市としての発展が著しい。周辺には広い段丘面が発達しており、農業用水確保のために数多くの溜池が設けられている。

大塚遺跡は、加古川左岸を並行して流れる別府川に沿う段丘上に位置している。この段丘は、発掘調査地付近で標高 4m 前後を測り、北から南へ緩やかな傾斜をもつ完新世段丘である。調査区の北約 500m 付近には、古代山陽道の推定線が東西に延び、現在もこれを挟むように国道および鉄道が東西交通の大動脈として機能している。



第1図 道路の位置

第2節 歴史的環境

加古川市域には、1980年代以降の開発事業により、多数の遺跡が見いだされ発掘調査が行われてきた。以下では、大塚遺跡周辺の加古川本流域にある遺跡を中心に概観してみよう。

【後期旧石器時代】

東播磨地域は、兵庫県下でも後期旧石器時代遺跡の密度が高い地域で、加古川市内だけでも40か所を超える遺跡が知られている（置田雅昭 1989）。遺跡の多くは、段丘上、あるいは段丘の縁辺部に設けられた溜池の縁で石器が採集されたことから知られるようになったもので、佐藤良二によって資料の集成がおこなわれている（佐藤 1980）。大塚遺跡近隣では、北方1kmにある坂元遺跡（19）において、後世の地層中に遺離した状況ではあるものの台形石器・ナイフ形石器が出土している（兵庫県教育委員会 2009および2011）。また、東方約4kmにある山之上遺跡では、国府型ナイフ形石器を含む多数のナイフ形石器、角錐状石器などが採集され、本地域を代表する遺跡とされている。

【縄文時代】

加古川市域の縄文時代遺跡は、これまでに23遺跡が知られている（兵庫県教育委員会 2011b）。しかしその内容を見ると、大部分は地表面における石撿や土器の採集例にとどまり、発掘調査を経て遺跡の全容が明らかにされたものは僅かである。

注目すべき事例としては、後期の敷石住居跡が検出された八幡町宮山遺跡、晩期～弥生時代前期の土器が出土した岸遺跡がある。大塚遺跡の近隣では、坂元遺跡（19）において有舌尖頭器が出土したほか、晩期の埋甕群が検出されている。

【弥生時代】

弥生時代になると、加古川下流域の遺跡は急増する。溝之口遺跡（25）、美乃利遺跡（27）、大野遺跡・坂元遺跡（19）などが拠点的集落として展開する。溝之口遺跡は弥生時代の全期間を通じて集落が存続し、居住城のほか、墓域、水田も見いだされている。古墳時代以降にも継続することから、拠点集落と呼ぶに相応しい遺跡である。溝之口遺跡の北東に隣接する美乃利遺跡は、前期の水田跡、中期の集落跡が確認されている。大野遺跡・坂元遺跡（19）でも弥生時代中期に集落が成立して後期にまで継続する。後期には、北在家遺跡（22）が成立する。

【古墳時代】

大塚遺跡の周辺では、北方約3km付近に広がる丘陵、段丘上に、日岡山古墳群、西条古墳群、二塚古墳群、石守古墳群、水足古墳群などが知られている。

日岡山古墳群は、全長85mの前方後円墳である櫛墓古墳をはじめとして、5基の前方後円墳、20基を超える円墳から成る大規模な前期古墳群で、そのうちの東車塚古墳と勅使塚古墳からは三角縁神獣鏡が出土している。

西条古墳群は、帆立貝式の大塚、尼塚、前方後円墳の行者塚の3基からなる中期の古墳群で、中でも行者塚は全長110mを測る加古川流域最大の古墳である。古墳の整備計画に伴い、1995・96年に発掘調査がおこなわれ、後円部の埋葬施設から中国製の帶金具が出土したほか、馬具、鉄挺などが出土した。また前方部西側の造り出しからは、家形埴輪のほか、アケビ、ヒシの実、鳥、魚等をかたどった土製品が出土して、造り出しの機能を推定する上で重要な資料となっている。

二塚古墳群、石守古墳群は、横穴式石室をもつ後期の古墳群である。

大塚遺跡の東方にある聖陵山古墳は、全長70mの前方後円墳である。古墳が立地するのは、海拔わず

か4mの海岸砂丘上であり、築造当時は海岸線にさわめて近かったと推定されている。明治以降の土取によって墳丘の形状は損なわれているが、その際に出土したという銅鏡のほか、竪穴式石室の天井石とみられる石材が残されている。大阪湾から播磨灘にかけて海岸線に並ぶ丸塚、五色塚ほかの古墳とともに、被葬者の海との関わりを想起させる古墳である。

【奈良時代以降】

8世紀に編纂された『播磨國風土記』によれば、東播磨地域にはすでに多くの里が成立していた事がわかる。考古学的遺跡と風土記に記載された「里」が直ちに対応できるわけではないが、加古川市域について



- | | | | |
|-----------|-------------|-----------|------------|
| 1. 大塚遺跡 | 2. 細田構居跡 | 3. 長砂構居跡 | 4. 古大内城跡 |
| 5. 古大内遺跡 | 6. 古代山陽道推定線 | 7. 聖陵山古墳 | 8. 長砂遺跡 |
| 9. 一式構居跡 | 10. 浜の宮遺跡 | 11. 尾上遺跡 | 12. 尾上構居跡 |
| 13. 今福遺跡 | 14. 安田構居跡 | 15. 鶴林寺 | 16. 野口城跡 |
| 17. 教信寺 | 18. 野口庵寺 | 19. 坂元遺跡 | 20. 具平塚遺跡 |
| 21. 良野遺跡 | 22. 北在家遺跡 | 23. 平野遺跡 | 24. 栗津遺跡 |
| 25. 溝之口遺跡 | 26. 溝之口摩寺 | 27. 美乃利遺跡 | 28. 栗津大年遺跡 |
| 29. 加古川城跡 | 30. 石彈城跡 | 31. 松岡青羅基 | |

第2図 大塚遺跡と周辺の遺跡（兵庫県遺跡地図 1/35,000 より作成）

ても多くの説話が収録されており、考古資料との比較研究は重要な課題である。

奈良時代になると、当時最大の幹線道路で会った山陽道が敷設される。古代山陽道（6）は、大塚遺跡の北約500m付近を通過すると推定されているが、今回の事業（尾上小野線建設）にともなう埋蔵文化財調査では明瞭な遺構を検出することはできなかった。

しかし、大塚遺跡の東方約700mには、賀古駅家と推定される古大内遺跡（5）がある。古大内遺跡では、兵庫県立考古博物館が実施した学術調査によって駅館の一部と、山陽道から駅家への進入路が復元されている（兵庫県教育委員会2010b）。延喜式によれば、賀古駅家は馬40匹を配備する日本最大の駅家であったという。この時期と並行して、大塚遺跡周辺では野口庵寺（18）、溝之口庵寺（26）などが造営される。

坂元遺跡（19）でも奈良時代の集落が展開しており、大塚遺跡で多数検出された溝も、このような経緯と無関係ではあるまい。

中世になると、大塚遺跡周辺には多くの遺跡が展開する。中でも大野遺跡には方形に区画された屋敷地群が形成されるようになり、加古川の水運を利用した集落と推定されている（兵庫県教育委員会2010a）。また、細田構居跡（2）、長砂構居跡（3）、古大内城跡（4）、一式構居跡（9）、尾上構居跡（12）、安田構居跡（14）、野口城跡（16）、加古川城跡（29）、石彈城跡（30）など、多数の居館、城跡が成立する。

参考文献

- 佐藤良二 1980「兵庫県旧石器時代遺跡分布図および地名表」『旧石器考古学』21 旧石器文化談話会 pp8
兵庫県教育委員会 2009『坂元遺跡II－東播磨都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書－』
兵庫県教育委員会 2010a『大野遺跡－（一）別府川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
兵庫県教育委員会 2010b『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書I』
兵庫県教育委員会 2011a『坂元遺跡III（主）加古川小野線（東播磨南北道）道路改築事業に伴う発掘調査』
兵庫県教育委員会 2011b『兵庫県遺跡地図』
置田雅昭 1989「第一節 最初の人々」『加古川市史』第1巻 pp106～pp137

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所が実施する、社会资本整備事業（（都）尾上小野線）に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成18（2006）年度に加古川土木事務所の事業計画に基づいて対象地の分布確認調査を実施した。この分布調査で遺物が採集され、兵庫県教育委員会は加古川土木事務所に対し、事業地内に埋蔵文化財が存在するとした回答（教理文第1049号 平成18年5月9日付）をおこなった。

平成23（2011）年度には、兵庫県教育委員会が、同事業所の依頼（東播（加土）第1822号 平成22年12月27日付）に基づいて確認調査を実施した。この確認調査で、遺構の存在が明らかとなった範囲について、同年度および翌平成24年度に加古川土木事務所からの依頼により（東播（加土）第1030号 平成23年4月15日付ならびに東播（加土）第1357号 平成24年7月26日付）、本発掘調査を実施した。

調査年度	調査番号	調査種別	調査機関	担当者	調査面積(m ²)
2006	2006052	分布調査	2006/4/19	渡辺 畏	27,900
2011	2011171	確認調査	2011/4/12	小川強太	40
2011	2011263	本発掘調査	2011/8/17～011/10/17	渡辺 畏・久保弘幸	1,136
2012	2012019	確認調査	2012/7/19	中村 弘	43
2012	2012116	本発掘調査	2013/1/24～2013/3/8	山田清朝・仁尾一人	992

第1表 大塚遺跡調査一覧

第2節 発掘調査の概要

（1）分布調査

分布調査は、上記事業地を対象として地表面の観察により実施した。調査対象面積は、27,900m²である。分布調査の時点では、地表面で観察可能な遺構は見いだされなかつたが、須恵器・土師器等の散布が認められたほか、事業地が古代山陽道推定地および周知の遺跡である細田構居の隣接地であったため、確認調査を実施することになった。

【調査の体制】

調査主体 兵庫県教育委員会

分布調査担当者 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

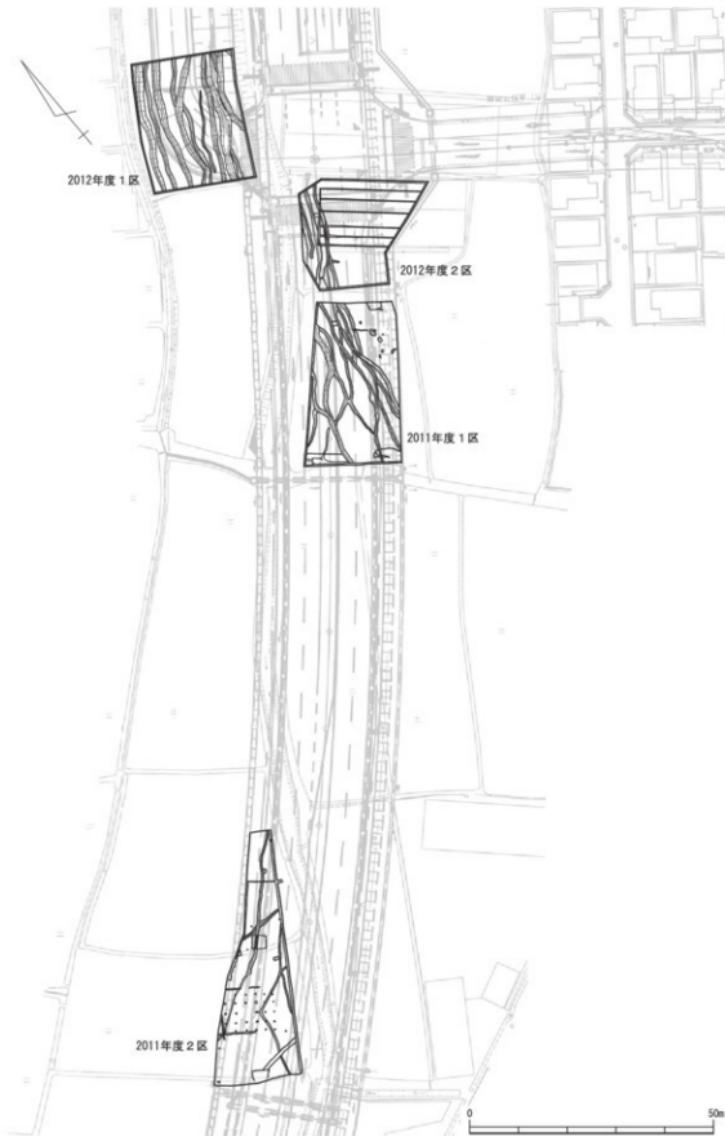
調査第1課 渡辺昇

（2）確認調査

【調査の体制】

平成23（2011）年度の調査

確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、2m×2mの試掘坑10か所を設定して実施し



第3図 調査区位置図 (1/3,000)

た。調査体制は以下のとおりである

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

企画調整課 小川弦太

確認調査の結果、試掘坑のうちトレンチ 3・4・9・10において柱穴、溝等の遺構が検出され、遺物が出土した。

平成 24（2012）年度の調査

2 地区において確認調査を実施した。古代山陽道に隣接する 1 区では、1m×20m と、1m×15m のトレンチを設定して調査を実施した。また、平成 23 年度調査区に隣接する 2 区では、2m×2m の試掘坑 2 か所を設定して調査を実施した。

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

企画調整課 中村 弘

その結果、1 区では遺構・遺物を認めず、2 区では溝を検出した。

（3）本発掘調査

【調査の体制】

平成 23（2011）年度の調査

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第 1 課 渡辺 畿・久保弘幸

平成 24（2012）年度の調査

発掘調査主体 兵庫県教育委員会

発掘調査担当者 公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

調査第 1 課 山田清潮・仁尾一人

【調査の方法と成果の概要】

本発掘調査区は、2 年度 4 地区にわたり総面積は 2,128 m²である。調査は、重機による表土掘削の後、遺物包含層以下を人力により掘削し、遺構検出作業を実施するという手順でおこなった。また遺構面の図化は、平成 23（2011）年度は（株）ジオテクノ関西、平成 24（2012）年度は仲栄開発（株）に委託して空中写真測量を実施したが、個別遺構の平面・断面図を必要とする場合は調査担当者がこれを作成し、あわせて写真撮影も実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝等が検出された。ただし、調査区全体として見ると遺構密度が低く遺物包含層、および遺構内からの出土遺物がごく散漫であったことを考慮するならば、今回の本発掘調査区付近は遺跡の縁辺部と判断される。

第 3 節 整理事業の概要

整理事業は、平成 27（2015）年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に

において実施した。整理事業は久保の担当の下に、兵庫県立考古博物館において公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課、長濱誠司がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。

また、本書に収録した遺物写真については、(株) クレアチオに委託して撮影を実施したほか、放射性炭素 14 の AMS による年代測定を(株) 加速器分析研究所に委託して実施し、その成果は本書中に収録している。なお、本報告書に収録した遺物、写真、図等については、すべて兵庫県立考古博物館に保管している。

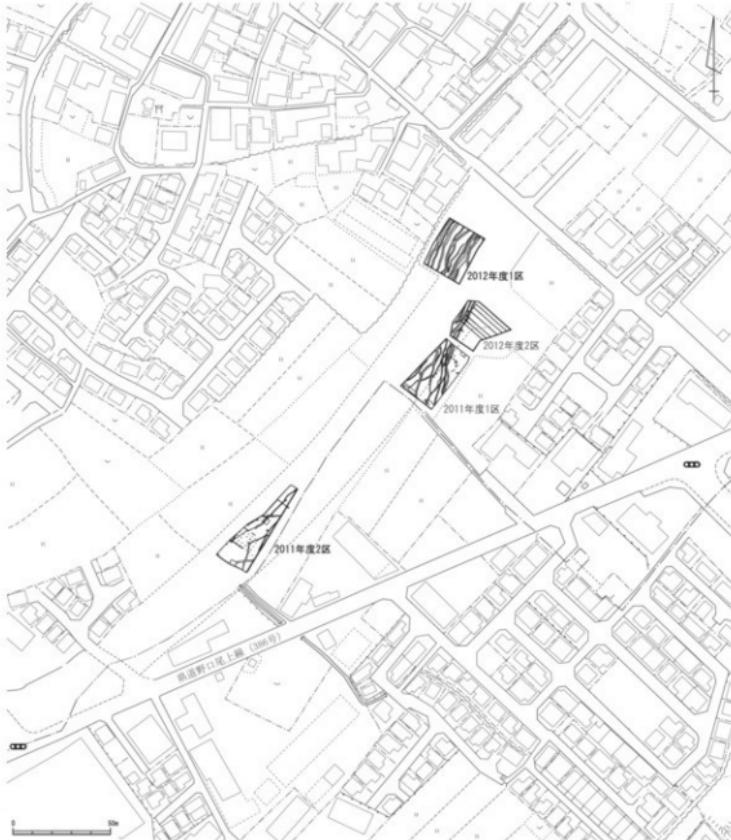
なお、本発掘調査時に青木哲哉氏（立命館大学）の指導の下に実施した深掘トレンチによる調査成果については、青木氏より玉稿を頂戴し本書第4章に掲載している。

第3章 遺構と遺物

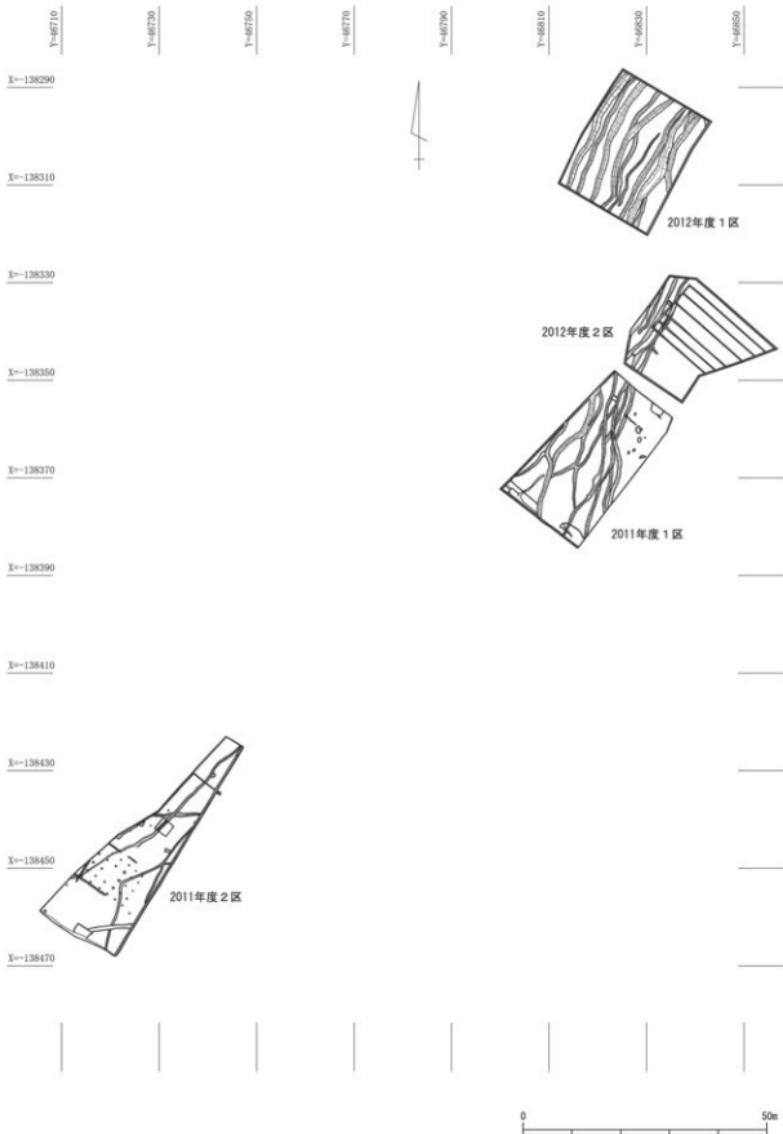
第1節 本発掘調査区の層序と遺構面の位置

【本発掘調査区の位置】

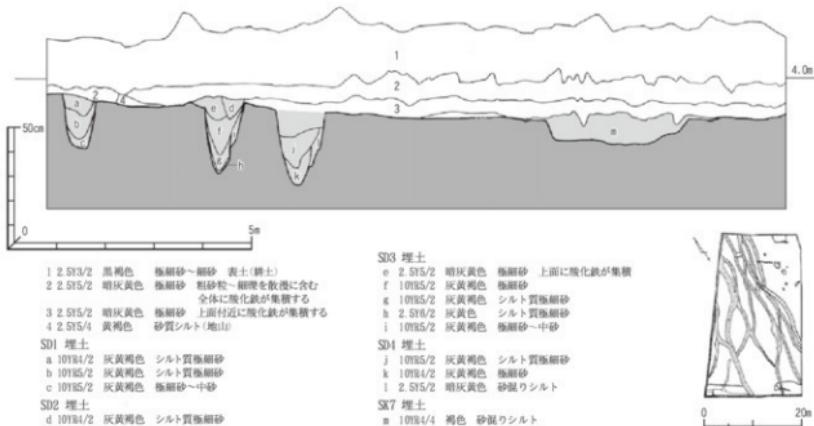
本発掘調査区は別府川の東に位置し、北の丘陵地帯から流下する別府川が形成した沖積平地にあたる。兵庫県遺跡分布地図（兵庫県教育委員会 2011）によれば、今回の調査区は、同じ別府川東側の微高地にある細田構居遺跡の東側に位置し、微高地の最高所から東に向けて緩やかに高度を下げた微凹地に近い位置にあたる。このような地形環境から、今回の調査区は大塚遺跡の中でも縁辺に近い部分に相当すると考えられる。調査地付近の現地表面の標高は 4.5m 前後、遺構面の標高は 4m 前後を測る。



第4図 遺跡の位置

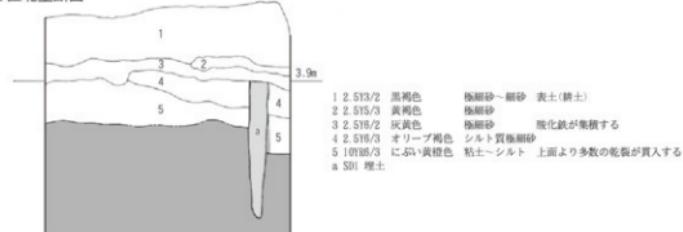


第5図 調査区全体図

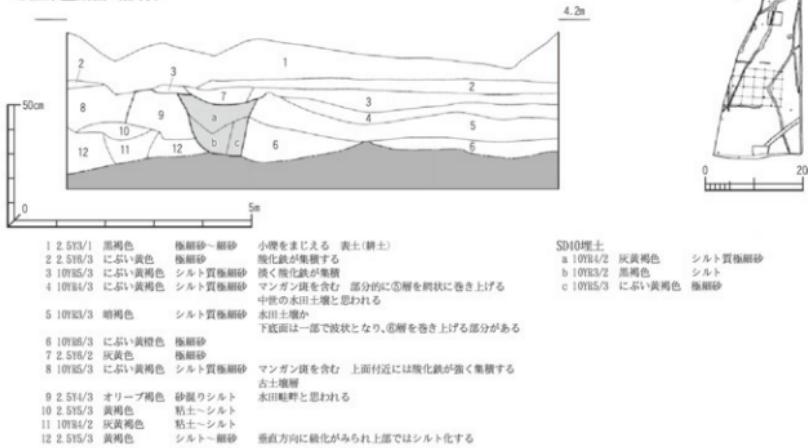


第6図 2011年度調査 1区北壁断面図

2区北壁断面



2区東壁断面(部分)



第7図 2011年度調査 2区北壁断面図

調査区内では、表土層（耕土）以下にシルト～砂からなる土壤化した堆積物が認められ、すべての遺構は、この下位にあるにぶい黄褐色～黄灰色を呈するシルト～砂質シルト層上面で検出された。2011年度調査の1区および2012年度調査区で検出された多数の溝は、後述するように奈良時代～鎌倉時代に属すると思われるが、当該期の古土壤層（遺物包含層）はほとんど遺存していなかった。また、2011年度調査の2区では鎌倉時代の遺構が検出されたが、この時期の古土壤層（遺物包含層）は僅かながら調査区壁面において認められた（第6・7図）。

表土層（現代の耕土層）と遺構検出面との間の堆積物中からは、縄文時代から近世に至る多様な遺物が転磨を受けた状態で散漫に出土していることから、近世以降の耕地の造成と耕作によって遺跡に関連する古土壤層が相当程度の破壊を受けたものと思われる。

調査にあたっては、表土層のみを機械掘削により除去し、以下は人力によって遺構検出面までの掘削を実施した。古土壤層（遺物包含層）の遺存状態が劣悪であったことから、人力掘削における遺物の出土は散漫であった。

第2節 遺構と遺物

1 2011年度調査 1区

(1) 概要

溝14条、土坑6基、柱穴状遺構6基、畦畔2条、炭化物集中1か所が検出された（第8図）。

溝は、調査区の西側約2/3ほどの範囲に集中している。重複関係を見せつつ緩やかに蛇行し、北→南方向に延びる一群と、北西→南東方向に延びてこれらを切るSD5・6・20の一群とに分離できる。

土坑6基は調査区北東部に分布している。不整形で規模もまちまちである。また、柱穴状遺構も北東部に分布しているが、建物跡等を構成する並びは認められない。

炭化物集中はSD10の埋土上部で検出されたもので、溝が埋没する最終段階近くで形成されたものである。

以下では遺構ごとに記載をおこない、合わせて出土遺物についても記載する。

(2) 溝

ア SD1

調査区北隅から緩やかに蛇行しつつ、調査区南壁に至る。最大幅0.7m前後、深さ30cm前後を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せる部分と、緩やかな落ち込みとなる部分が見られる（第9図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD16と交差し、SD1がSD16を切る。

図示可能な遺物は出土しなかったが、埋土中より転磨の進んだ須恵器の細片が出土している。

イ SD2

調査区北壁からSD3に重複しつつほぼ直線的に延び、調査区内での延長10.6m、最大幅0.95m、深さ15cm前後を測る。断面形は、緩やかなまるみをおびた落ち込みを見せる。北壁での断面観察によれば、明瞭にSD3を切る。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

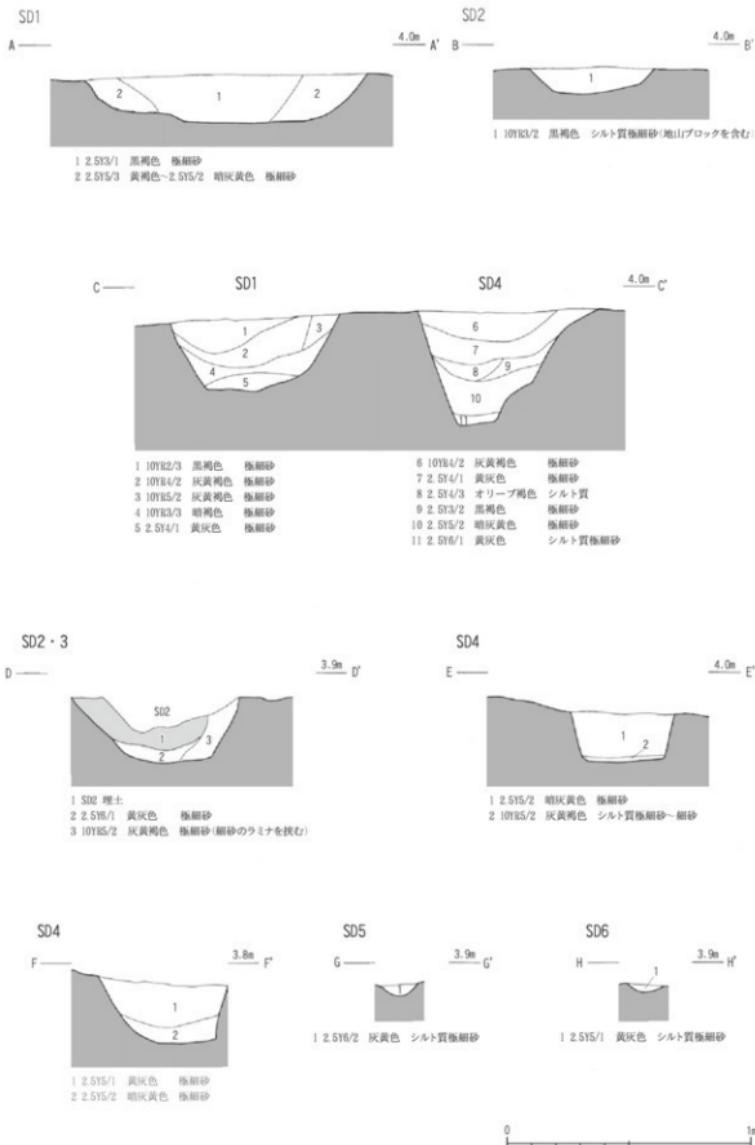
図示可能な遺物は出土しなかったが、埋土中より転磨の進んだ須恵器の細片が出土している。

ウ SD3

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ東壁南半に至る。最大幅0.9m前後、深さ30cm前後を測る。断面形はやや急斜な落ち込みを見せる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。



第8図 2011年度調査 1区平面図



第9図 SD1~SD6 断面図

SD4・15・16 を切る。

第12図1は、須恵器皿である。胎土は精良で、堅密に焼成されており、ほとんど転磨を受けていない。わずかに膨らみをもつ短い口縁部を見せる。底部はヘラ切り無調整である。高台はほぼ方形をなし、骨付部は凹む。器表面は丁寧に調整されており、稜線は明瞭である。奈良時代に属する遺物である。

このほか、埋土中より須恵器の細片が出土している。

エ SD4

調査区北壁から緩やかに蛇行しつつ、調査区東壁南部に至る。最大幅 0.9m 前後、深さ 55 cm を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せ、底面が平坦な箱形をなす部分と、底面幅が狭い V 字形をなす部分とが見られる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD17 を切る。

第12図2は、東播系須恵器の小塊である。底部は平高台をなし、緩やかに彎曲する口縁部が立ち上がる。底部と口縁部との境界は、回転ナデにより明瞭に形成されている。

オ SD5

調査区北東隅に位置し、ほぼ直線的に延びて 1.6m の延長を測る。最大幅 0.15m 前後、深さ 6 cm を測る。断面形は緩やかな半凸レンズ形となる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SK7 を切る。遺物の出土は見られなかった。

カ SD6

調査区北東部に位置し、ほぼ直線的に延びて 3.3m の延長を測る。最大幅 0.15m 前後、深さ 5 cm を測る。断面形は緩やかな半凸レンズ形となる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD4 を切る。遺物の出土は見られなかった。

キ SD9

調査区西壁北部から大きく蛇行しつつ、南～南西方向へ延びて SD10・18 に切られ、その先は検出されなかった。最大幅 0.9m 前後、深さ 55 cm を測る。断面形は半凸レンズ形となる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

ク SD10

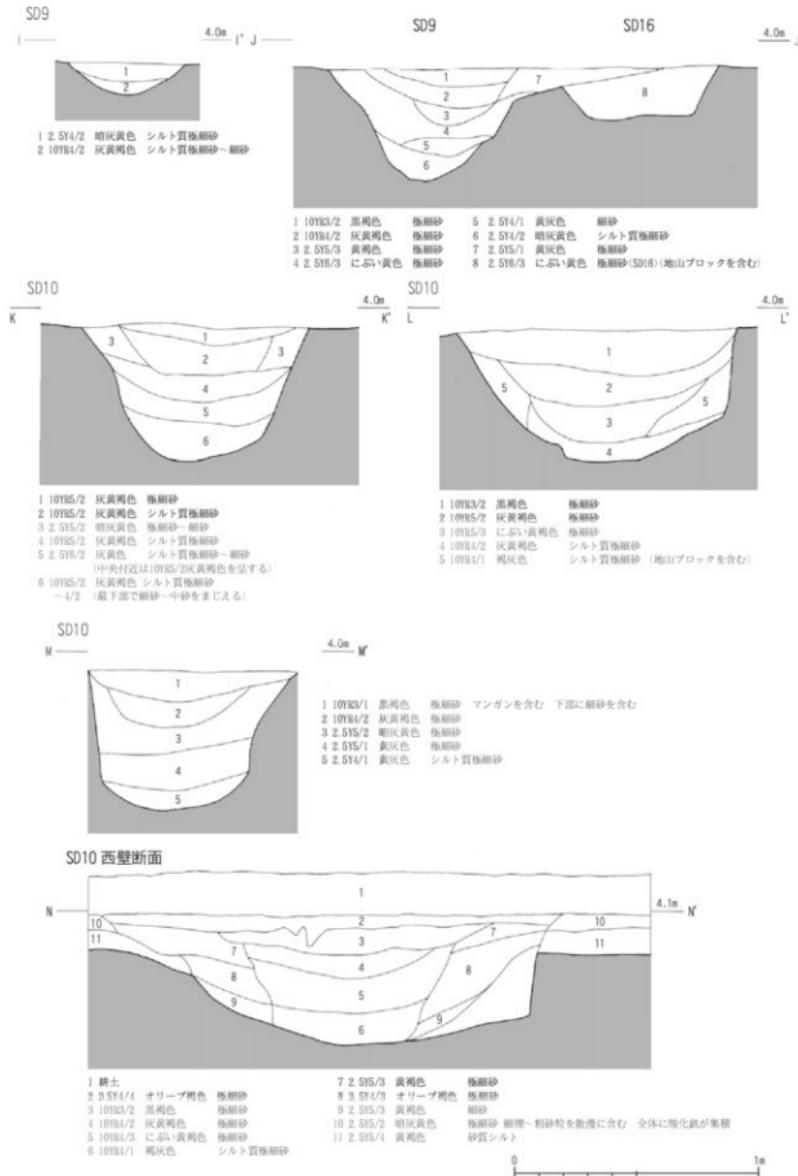
調査区西壁北部から大きく蛇行しつつ、南～南西方向へ延びて SD18 に切られ、その先は検出されなかった。SD18 との重複状況から、これより先は SD18 の流路と重なっていたものと推察される。最大幅 1.3m 前後、深さ 60 cm を測る。断面形は、急斜度の落ち込みを見せる深い U 字形を呈する。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していたが、下底付近では一部に中砂の堆積が認められたほか、地山のブロックを混入する部分が認められた。遺物の出土は見られなかった。

ケ SD15

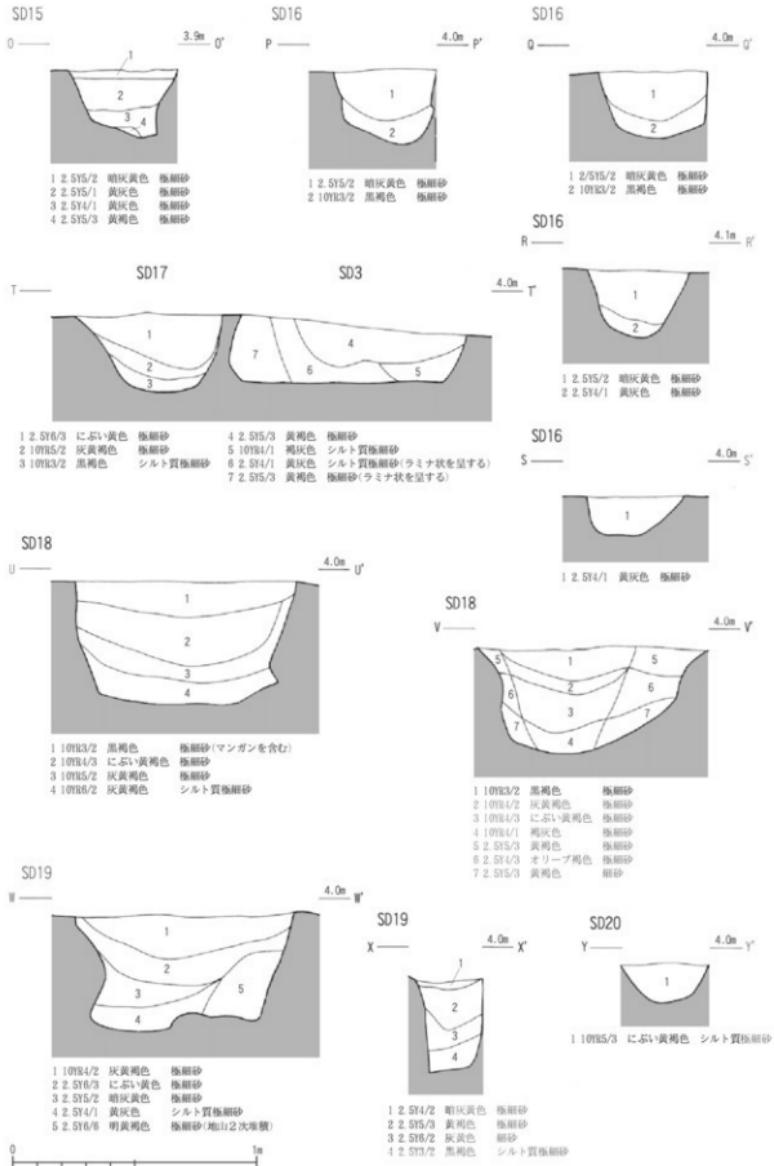
調査区北部で SD2・3 と SD4 との間に位置し、緩やかに蛇行しつつ南～南西方向へ延びて SD2・3、および SD1 に切られており、その先は検出されなかった。SD1 との重複状況から、これより先は SD1 の流路と重なっていたものと推察される。最大幅 0.8m 前後、深さ 30 cm 前後を測る。断面形は急斜度の落ち込みを見せ、底面は緩やかに凹む。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

コ SD16

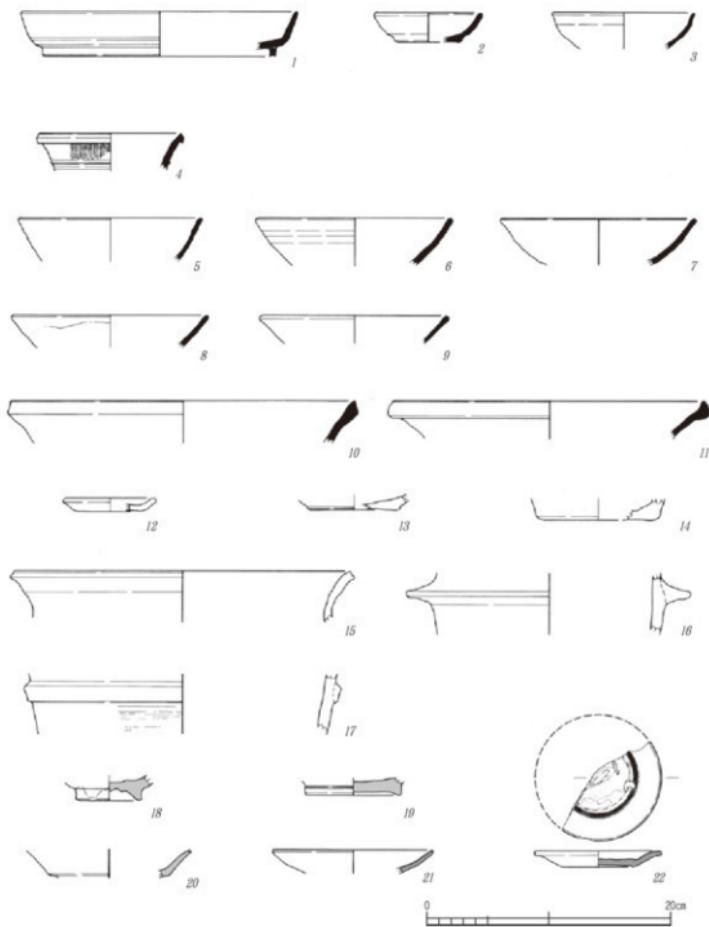
調査区北部で SD2・3 によって切られた位置に始まり、緩やかに蛇行しつつ調査区南部で SD1 に切られる。発掘調査時点ではこれより先は検出できなかったが、航空写真を検討すると、SD1 の東側に延



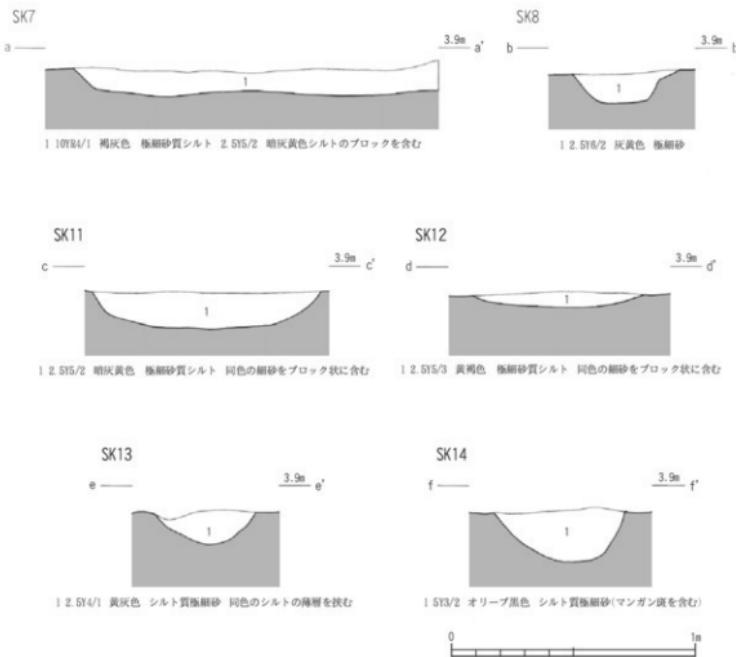
第10図 SD9・SD10・SD16 断面図



第11図 SD3・SD15～SD20断面図



第12図 2011年度調査1区出土遺物



第13図 SK7・SK8・SK11～SK14断面図

びる暗色部が認められることから、本来は SD1 に切られた位置より南東へと延びていたと判断される。最大幅 0.8m 前後、深さ 30 cm 前後を測る。断面形は垂直に近い落ち込みを見せ、深い U 字形を呈する。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

サ SD17

調査区東部で SD4 によって切られた位置に始まり、緩やかに蛇行しつつ調査区東壁に至る。最大幅 0.7m 前後、深さ 30 cm 前後を測る。断面形は急斜度の落ち込みを見せる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

図示できない資料であるが、埋土中より土師器壺体部の細片が出土している。

シ SD18

調査区西壁から蛇行しつつ、南～南西方向へ延びて調査区南壁に至る。SD9・10・19 を切る。最大幅 0.95m 前後、深さ 50 cm 前後を測る。断面形は垂直ないしは急斜度の落ち込みを見せ、一部にはオーバーハングも見られた。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

第12図3は、小型の須恵器壺である。全体に回転ナデ調整が施され、口縁部は外反する。束縛系中世須恵器にあたる。ほかに図示できない資料であるが、埋土中より土師器皿の破片が出土している。

ス SD19

調査区西壁から緩やかに蛇行しつつ南西方向へ延び、調査区南西隅に至る。SD18 に切られる。最大幅

0.8m 前後、深さ 50 cm 前後を測る。断面形は垂直急斜度の落ち込みを見せ、一部にはオーバーハングも見られた。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

セ SD20

調査区南部に位置し、ほぼ直線的に延びて 3.3m の延長を測る。最大幅 0.4m 前後であるが、西端のみは大きく膨らんで幅 1.1m 前後を測る。深さは 20 cm 前後を測る。断面形は緩やかな半凸レンズ形となる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

(3) 土坑

ア SK7

調査区北端に位置し、遺構の北側は調査区外にのびる。調査区内の形態からは、圓丸方形ないしは歪んだ梢円形を呈すると推定される。調査区内での検出規模は、長径 2.7m、短径 1.6m、深さ 12 cm を測る浅い皿状を呈する。土坑底面はわずかに起伏するが、概ね平坦と言ってよい。遺物の出土は見られなかった。

イ SK8

調査区北東部に位置する。歪んだ梢円形を呈し、長径 0.53m、短径 0.4m、深さ 14 cm を測る。土坑底面は平坦である。遺物の出土は見られなかった。

ウ SK11

調査区北東部に位置する。不整梢円形を呈し、長径 1.56m、短径 0.97m、深さ 16 cm を測る。土坑底面は緩やかな凹みをなす。遺物の出土は見られなかった。

エ SK12

調査区北東部に位置する不整形な土坑である。長径 1.04m、短径 0.7m、深さ 16 cm を測る。土坑底面は緩やかな凹みをなす。遺物の出土は見られなかった。

オ SK13

調査区北東部に位置する不整形な土坑である。長径 0.64m、短径 0.46m、深さ 15 cm を測る。土坑底面は舟底形をなす。遺物の出土は見られなかった。

カ SK14

調査区北東部に位置する不整形な土坑である。長径 1.28m、短径 0.54m、深さ 22 cm を測る。土坑底面は舟底形をなす。遺物の出土は見られなかった。

(4) 眺畔

調査区南西部で、東西および南北方向に延びる痕跡的な眺畔が検出された。眺畔に伴う水田面は遺存しておらず、形成された時期等は不明であるが溝群以降の形成である可能性が高く、状況からは中世～近世の所産と推測される。出土遺物は見られなかった。

(5) 包含層等出土の遺物

第 12 図 4~28 は、遺物包含層（古土壤層）より出土したものである。

4 は須恵器壺の口縁部である。精選された胎土を用い、堅緻に焼成されている。頭部表面には柳描波状文が施され、その下には断面三角形の突帯が貼り付けられている。

5~9 は束縛系須恵器の輪である。5 は比較的急斜度の立ち上がりを見せ、体部がやや膨らみを見せるが、8・9 は立ち上がりの斜度が緩く、体部も直線的である。

10・11は東播系須恵器の鉢である。10は口縁端部がわずかに内傾する方形をなす。11は口縁端部を肥厚させ、上方へつまみ上げる。

12は土師器小皿である。

13は土師器椀の底部である。強い転磨を受けている。

14は土師器底部である。平坦な底部から垂直に近い急斜度で立ち上がる体部を見せることから、婧壺の可能性も考慮される。

15は土師器甕の口縁部である。

16は土師器羽釜である。

17は円筒埴輪である。

18は龍泉窯系青磁碗の底部である。13世紀代に属する。

19は白磁碗底部である。

20は白磁皿である。底部から屈折して立ち上がる体部を見せる。河南産白磁であり、13～14世紀代に属すると思われる。

21は陶器皿である。近世の所産であろう。

22は瀬戸美濃系の陶器皿である。見込み部は不規則に釉がはがれる。16世紀代の所産であろう。

第14図 S1はチャート製剝片である。背面側の剥離痕と主要剥離面の剥離方向は大きくずれており、同一打面上で打点を横方向に移動しつつ、連続的に剥離されたものと思われる。東播磨地域では、弥生時代にはチャートの利用率はごく低いものであることから、縄文時代以前の所産と推定される。



第14図 2011年度調査 1区出土石器

2 2011 年度調査 2 区

(1) 概要

2 区では、掘立柱建物跡 1 棟、溝 8 条、土坑 2 基が検出された。掘立柱建物跡は調査区南部に位置しており、南北両側に建物跡と同一方位に直線的に延びる溝を伴う。

他の溝のうち 3 条は蛇行しつつ延びる溝であり、2 条はほぼ正しく東西方向に直線的に延びる。

土坑 2 基は、特に他の遺構との関連性を示し得ない。

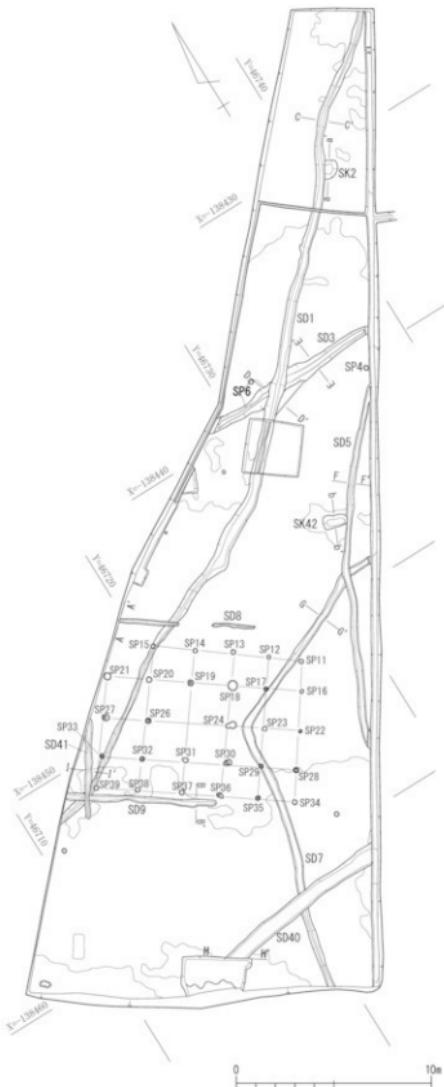
(2) 掘立柱建物跡

梁行 4 間 × 柱行 5 間の総柱式建物跡であるが、中心のみ 1 基分の柱穴を欠く（第 16 図）。

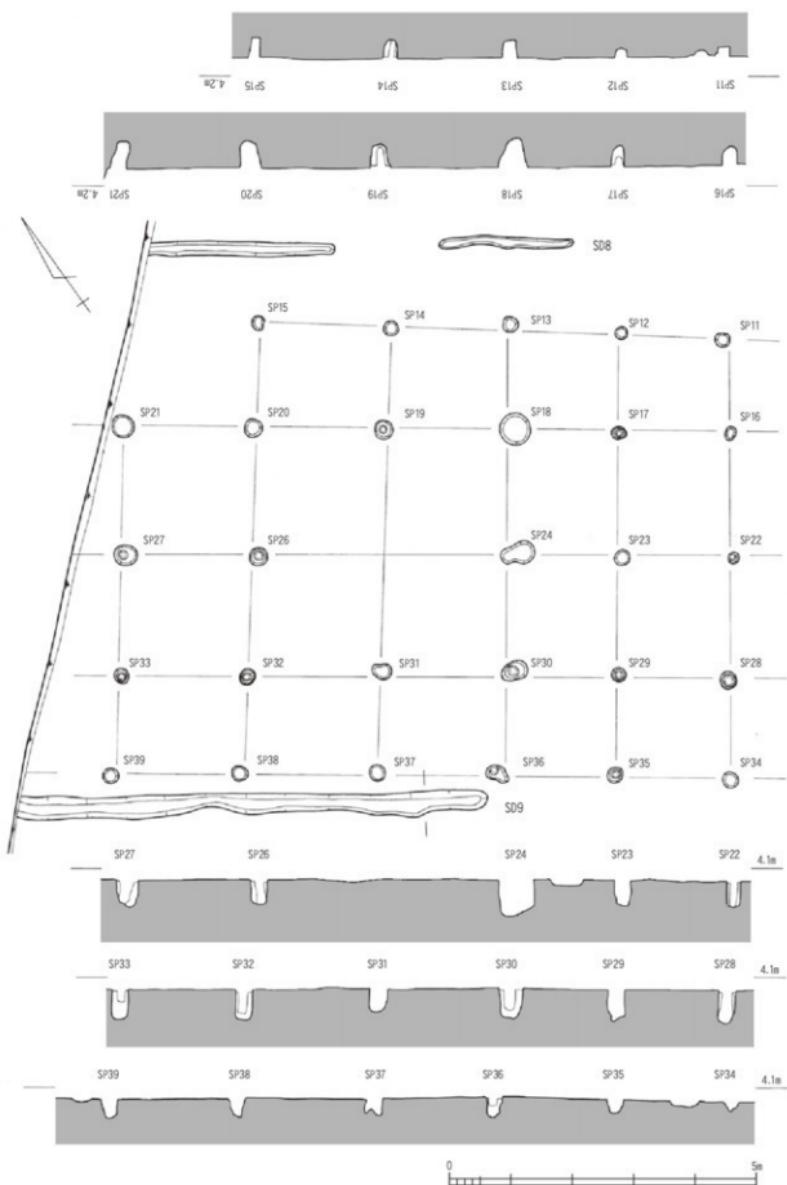
梁行の方位は、N46° W（方位は座標北基準）である。

仔細に観ると、梁行の柱間は中央の 2 列が平均 2.02m であるのに対し、南北では平均 1.64～1.67m となっており、中央の柱間が南北両側よりも広い。柱間と後述する柱穴の規模の違いから、本建物跡の南北両側の柱列は庇であった可能性がある。

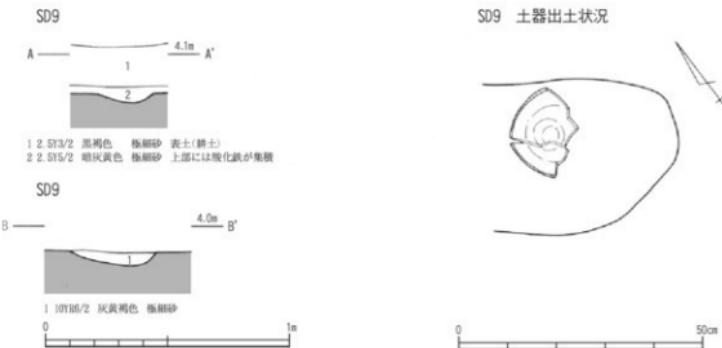
建物跡の規模は、梁行 7.2m、柱行 10.24m で、床面積は 73.7 m² である。建物跡を構成する柱穴は円形～不整円形を呈し、長径 25～52 cm、検出面からの深さは 12～60 cm を測るが、中央梁行方向の 2 列が深さ 36～52 cm であるのに対し、南北両側では 12～32 cm と明らかに規模が小さい。建物跡の南北両側



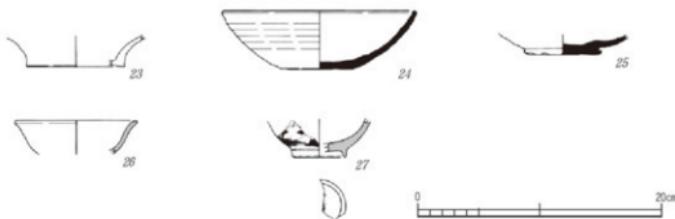
第 15 図 2011 年度調査 2 区平面図



第16図 SB1 平面図・断面図



第17図 SD8・SD9 断面図 SD9 遺物出土状況図



第18図 2011年度調査 2区出土遺物

には、建物跡に平行して SD8・9 が延びる。規模は、SD8 が幅 25 cm 前後、深さ 5 cm 前後を測り SD9 が幅 40 cm 前後、深さ 6 cm 前後を測る。いわゆる雨落ち溝と考えられる。

SD8・9 はいずれも幅広跡西方の調査区外へと延びることから、建物跡がさらに西側へ延びている可能性も考慮される。

第18図 23 は、柱穴 12 より出土した土師器楕である。平坦な底部から強く外反して立ち上がる体部を見せる。掘立柱建物跡の柱穴からは、この他に図示できない資料として柱穴 12 上部、29、37 からそれぞれ土師器の細片が出土している。

第18図 24 は、SD9 より出土した須恵器楕である。平坦な底部と、緩やかな膨らみをもつ体部を見せる。底部は糸切りである。この他に、SD9 の埋土中から土師器の細片が出土している。SD8 からは遺物の出土は見られなかった。

(3) 溝 (第19図)

ア SD1

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区西壁南部に至る。最大幅 0.9m 前後、深さ 50 cm 前後を測る。断面形は 45° 前後の落込みを見せ、底面幅は比較的狭い。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD3 を切る。

イ SD3

調査区東壁から、直線的に延びて調査区西壁に至る。最大幅 1.0m 前後、深さ 60 cm前後を測る。断面は急斜度な落ち込みを見せ、一部では垂直に近い。底面幅は広く、U 字形を呈する。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD1 に切られる。出土遺物は見られなかった。

ウ SD5

調査区東壁北部から、緩やかに曲がってふたたび調査区東壁に至る。最大幅 0.4m 前後、深さ 20 cm前後を測る。断面形はまるみを帯びた落ち込みを見せる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD7 を切る。出土遺物は見られなかった。

エ SD7

調査区東壁中央付近から西方向に延び、屈曲して調査区南壁に至る。最大幅 0.5m 前後、深さ 20 cm前後を測る。断面形は急斜度の落ち込みを見せ、底面は幅広く平坦である。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD5・40 に切られる。出土遺物は見られなかった。

オ SD40

調査区東壁南部から直線的に西に延びるが、試掘坑に切られている。最大幅 1.0m 前後、深さ 40 cm前後を測る。断面形は比較的緩斜度で直線的な落ち込みを見せ、底面の幅が狭い開いた V 字形を呈する。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD7 を切る。

第 18 図 25 は、須恵器楕の底部である。低い平高台をなし、底面は回転糸切りである。この他に、埋土中より土師器小皿の細片が出土している。

カ SD41

調査区西壁南部から直線的に南へ延びる。最大幅 0.4m 前後、深さ 5 cm前後を測る。底面は緩やかに凹む。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。SD1・9 を切る。出土遺物は見られなかった。

(4) 土坑

ア SK2

調査区北部に位置する歪んだ円形の土坑で、西半を SD1 に切られる。残存部分の長径は 1.06m、深さは 38 cmを測る。断面形は 45° 前後の直線的な落ち込みを見せ、底面は比較的平坦である。土坑内は粘土～極細砂により自然埋没していた。出土遺物は見られなかった。

イ SK42

調査区中央部に位置する、不整長楕円形の土坑である。長径 1.25m、短径 0.68m、深さ 38 cmを測る。断面形は急斜度の落ち込みの逆台形状を呈する。土坑内は表土のブロックを含むシルト～砂によって、人為的に埋没されていた。SD5 を切る。出土遺物は見られなかったが、土坑埋土に表土ブロックが含まれることから、土坑そのものが近代以降の所産と思われる。

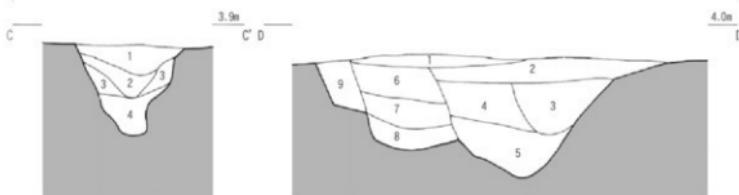
(5) 包含層出土の遺物

第 18 図 26 は白磁碗である。16 世紀代後半の華南産白磁と考えられる。

27 は肥前系染付磁器碗である。18 世紀後半の、いわゆる「くらわんか手」の碗である。

SD1

SD1・3



1 2.515/2 暗灰黄色 シルト質粘細砂

2 10Y6/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂

(底の微粒子を含む)

3 10Y5/3 にぶい黄褐色 粘細砂

前頭大の山地塊ブロックを含む

4 10Y5/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂

1 10Y6/3 暗褐色 黏土～シルト

2 10Y4/2 灰黄褐色 シルト～粘細砂

3 10Y5/2 灰黄褐色 粘細砂

4 10Y4/2 灰黄褐色 粘細砂 ③側面では淡色化する

5 10Y4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂

6 2.515/2 暗灰黄色 粘細砂

7 10Y4/3 にぶい黄褐色 シルト質粘細砂

8 10Y4/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂～細砂 細砂のラミナを挟む

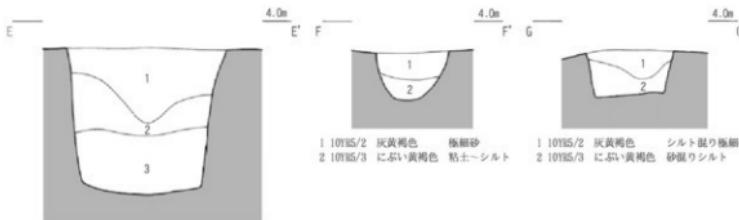
9 2.515/3 黄褐色 シルト質粘細砂

※ 1~5: SD1 6~9: SD3

SD3

SD5

SD7



1 10Y6/2 灰黄褐色 シルト質粘細砂

2 10Y5/3 にぶい黄褐色 砂混じシルト

3 10Y5/2 灰黄褐色 黏土～シルト

1 10Y5/2 灰黄褐色 粘細砂

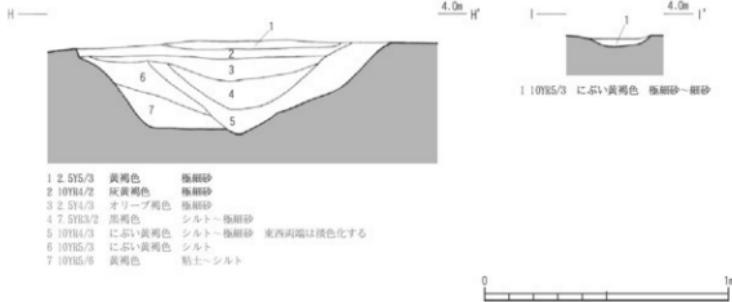
2 10Y5/3 にぶい黄褐色 黏土～シルト

1 10Y5/2 灰黄褐色 シルト混じ粘細砂

2 10Y5/3 にぶい黄褐色 砂混じシルト

SD40

SD41



1 2.515/3 黄褐色 粘細砂

2 10Y6/2 灰黄褐色 粘細砂

3 2.514/3 オリーブ褐色 粘細砂

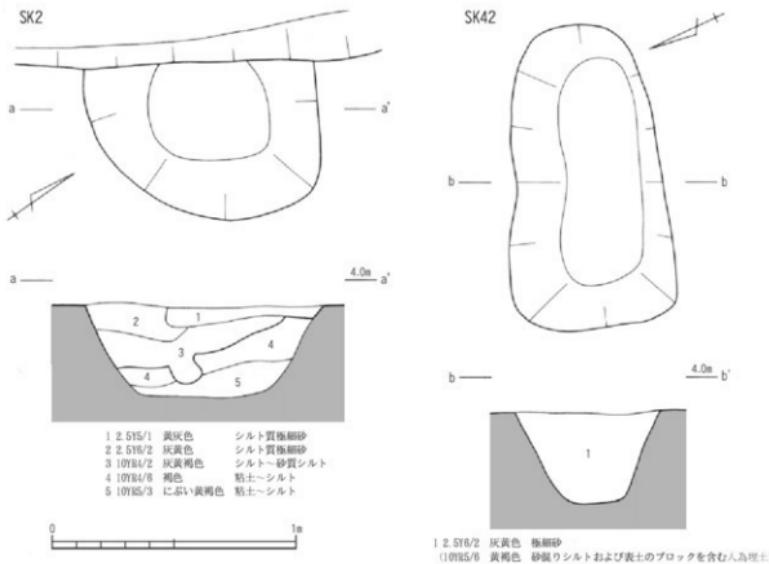
4 7.513/2 黑褐色 シルト～粘細砂

5 10Y4/3 にぶい黄褐色 シルト～粘細砂 東西南端は淡色化する

6 10Y5/3 にぶい黄褐色 シルト

7 10Y5/6 黄褐色 黏土～シルト

第19図 SD1・SD3・SD5・SD7・SD40・SD41断面図



第20図 SK2・SK42平面図・断面図

3 深掘トレンチの調査（第21図）

遺跡が立地する地形面の形成史を明らかにするため、2011年度調査区では1・2区とともに、調査終了後重機による深掘トレンチを掘削して、地層の堆積状況を調査した。この調査は、立命館大学の青木哲哉氏の指導の下に実施したものである。詳細は本書収録の青木氏の稿に譲るが、遺構面下最大約2.5mまで掘削をおこなった結果、炭化物試料を得ることができ、地形面形成史に関して明らかにすることができた。

4 2012年度調査1区

(1) 概要

2012年度調査1区では、溝11条が検出された。いずれも北一南の方位に延びており、SD4とSD5およびSD7とSD8とで重複関係が見られるほかは、ごく近接して平行に延びる（第22図）。

(2) 溝

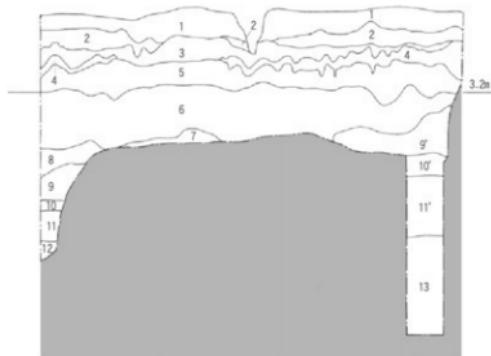
ア SD1

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅1.64m前後、深さ55cm前後を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せ、下底面が一段下がる部分が見られる（第23図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

イ SD2

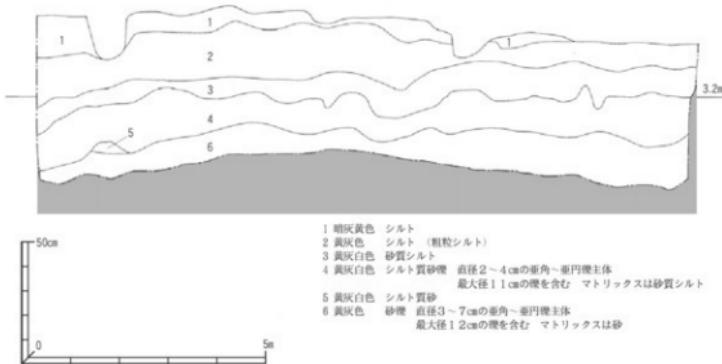
調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅0.86m前後、深さ55cm前後を測る。

深掘トレンチ 1



1 暗黄灰色	シルト	9 緑灰色	細砂質シルト
2 黄灰色	シルト質砂	9' 灰黄色	細砂質シルト
3 黄灰色	シルト	10 緑灰色	シルト
4 黄灰色	シルト質砂	10' 灰黄色	シルト
5 黄灰色	シルト	11 暗褐色	シルト質細砂
6 黄灰色	シルト質砂	11' 青灰色	シルト質細砂
7 灰黄色	シルト	12 暗褐色	シルト
8 灰黄色	シルト質砂	13 暗青灰色	砂塊 直径3~7cmの亜角~亜円塊主体 最大径15cmの塊を含む マトリックスは砂

深掘トレンチ 2



1 暗灰黄色	シルト
2 暗灰色	シルト (粗粒シルト)
3 暗灰白色	砂質シルト
4 暗灰白色	シルト質砂塊 直径2~4cmの亜角~亜円塊主体 最大径11cmの塊を含む マトリックスは砂質シルト
5 暗灰白色	シルト質砂
6 暗灰色	砂塊 直径3~7cmの亜角~亜円塊主体 最大径12cmの塊を含む マトリックスは砂

第 21 図 深掘トレンチ 1・深堀トレンチ 2 断面図

断面形は急斜な落ち込みを見せ、下底面が一段下がる部分が見られる（第 23 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

ウ SD3

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 1.55m 前後、深さ 55 cm 前後を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せる（第 23 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

第 25 図 28 は、縄文土器であろうか。転磨が進行しており、器表面の詳細な観察をなしえないが、波状を呈する口縁部に隆帯が垂下するように見える。隆帯に接して穿孔とも思える孔が認められるが、本来この遺物に穿たれた孔であるのか、破損の結果生じたものであるのか判然としない。焼成は酸化焰焼成である。遺存状況が劣悪なため、如何なる遺物として分類すべきか苦しむ資料である。

エ SD4

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 1.68m 前後、深さ 60 cm 前後を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せ、下底面が一段下がる部分が見られる（第 23 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

オ SD5

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 0.96m 前後、深さ 55 cm 前後を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せ、下底面が一段下がる部分が見られる（第 23 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

カ SD6

調査区中央付近で検出された、蛇行する溝である。最大幅 0.4m 前後を測る。溝内はシルト～細砂をとする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

キ SD7

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 2.3m 前後、深さ 50 cm 前後を測る。断面形は急斜に落ち込む（第 24 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

ク SD8

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 1.2m 前後、深さ 40 cm 前後を測る。SD7 に切られている。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

ケ SD9

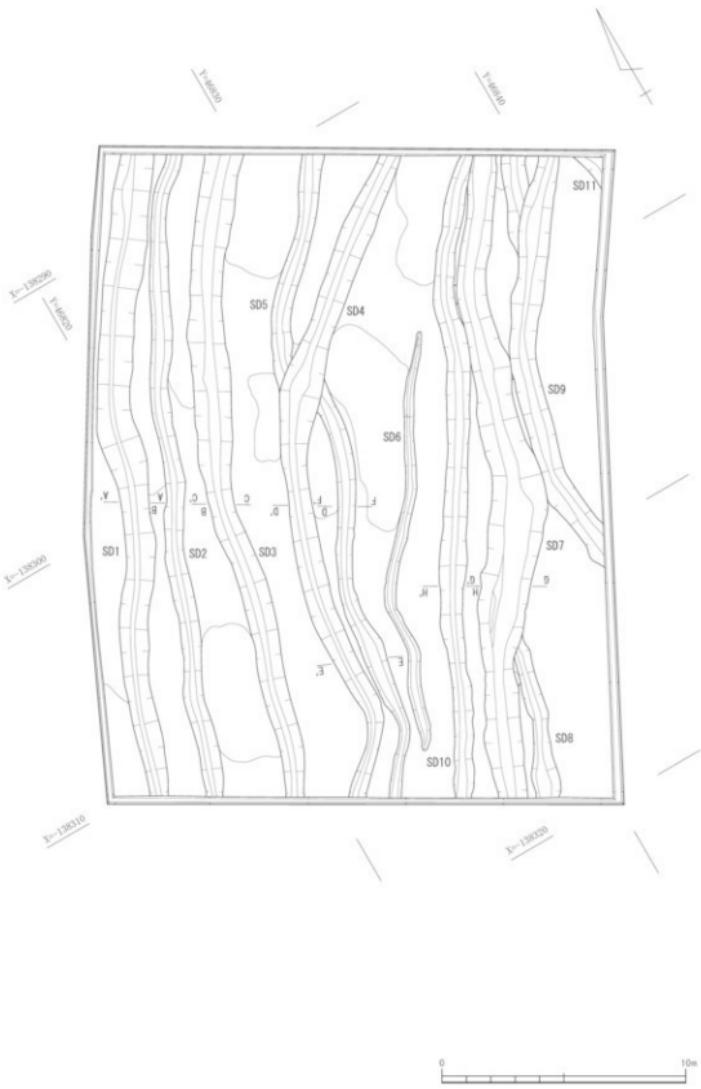
調査区北壁から、弧状にのびて調査区東壁に至る。最大幅 1.3m 前後を測る。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

コ SD10

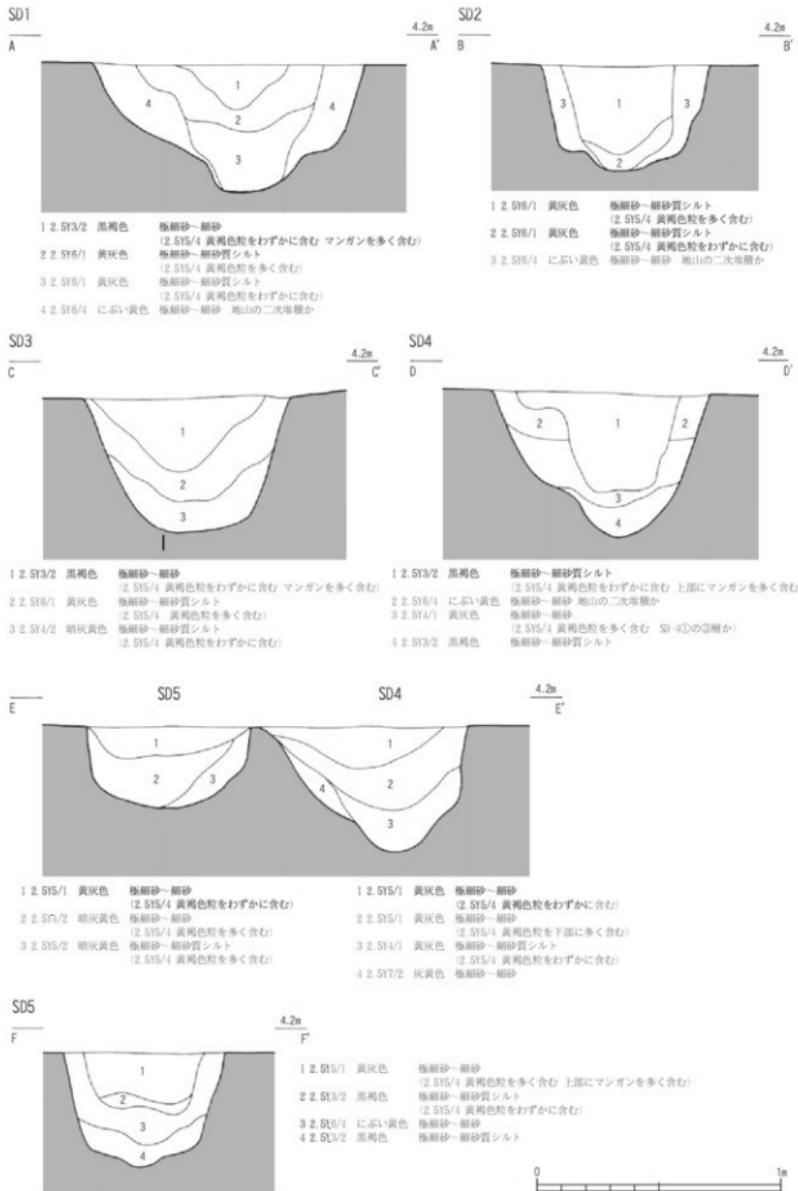
調査区北壁から、わずかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 1.13m 前後、深さ 55 cm 前後を測る。断面形は急斜な落ち込みを見せ、一部で 2 段の落ち込みを見せる（第 25 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。

サ SD11

調査区北東隅でわずかに検出された溝である。幅、深さ等は不明。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。遺物の出土は見られなかった。



第22図 2012年度調査1区平面図



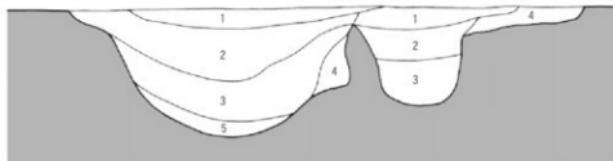
第 23 図 SD1 ~ SD5 断面図

G ——

SD7

SD8

4.2m G'

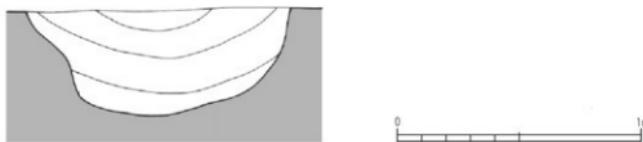


- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 2.5I3/2 黒褐色 細砂 | 1 2.5I6/1 黄灰色 細砂 マンガンをわずかに含む |
| (2.5I6/1 黄灰色細砂を多く含む) | (2.5I6/1 黄灰色細砂をわずかに含む) |
| 2 2.5I3/2 黒褐色 極細砂～細砂質シルト | 2 2.5I5/2 暗灰黄色 極細砂～細砂 |
| 3 2.5I4/2 暗灰黄色 極細砂～細砂質シルト | (2.5I6/1 黄灰色細砂を多く含む) |
| (2.5I6/1 黄灰色細砂をわずかに含む) | 3 2.5I3/2 黒褐色 極細砂～細砂質シルト |
| 4 2.5I5/2 暗灰黄色 細砂 | (2.5I6/1 黄灰色細砂をわずかに含む) |
| 5 2.5I4/2 暗灰黄色 細砂～粗砂 | 4 2.5I6/2 灰黄色 極細砂～細砂 |
| | (2.5I5/4 黄褐色粘土をわずかに含む) |

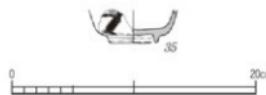
SD10

H ——

4.2m H



第24図 SD7・SD8・SD10断面図



第25図 2012年度調査1区出土遺物

(3) 包含層出土の遺物（第 25 図）

2012 年度調査 1 区の包含層からは、多様な時期の遺物が出土している。いずれも転磨を受けており、本来の包含層、ないしは遺構から遊離した後、耕作等により摩耗した遺物と思われる。

29 は弥生土器の鉢である。低い体部から屈折して外反しつつ立ち上がる口縁部を見せる。30 は小型の朝顔型埴輪と判断した。丸みをもった肩部の直下に擦を貼り付けている。31 は束播系須恵器皿である。中世前半期に属するものであろう。32 は須恵質、ないしは無釉陶器の甕である。所属時期は判然としないが、近世の可能性がある。33 は瓦質土器である。形態から、茶釜の可能性がある。34 は無釉陶器の甕で、近世の所産であろう。35 は肥前系染付磁器碗（湯呑）である。19 世紀後半以降の所産である。

5 2012 年度調査 2 区

(1) 概要

2012 年度調査 2 区では、溝 5 条が検出された（第 26 図）。図中、平行して直線的に延びる遺構番号が付されていない溝は、近代の水田耕作に伴う溝である。遺構の溝はいずれも北一南の方位に延びており、SD4 と SD5 で重複関係が見られるほかは、ごく近接して平行に延びる。

(2) 溝

ア SD1

調査区北西壁付近に位置し、緩やかな弧状をなす。最大幅 0.7m、深さ 50 cm 前後を測る。断面形は楕底形の落ち込みを見せる（第 27 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

遺物の出土は見られなかった。

イ SD2

調査区北西壁から、わずかに蛇行しつつ延びる。最大幅 0.62m 前後、深さ 15 cm 前後を測る。断面は逆台形から楕底形を呈する（第 27 図）。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

遺物の出土は見られなかった。

ウ SD3

調査区北壁から、緩やかに弧を描きつつ調査区南西壁に至る。最大幅 0.94m 前後、深さ 30cm 前後を測る。断面形楕底形の落ち込みを見せる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

遺物の出土は見られなかった。

エ SD4

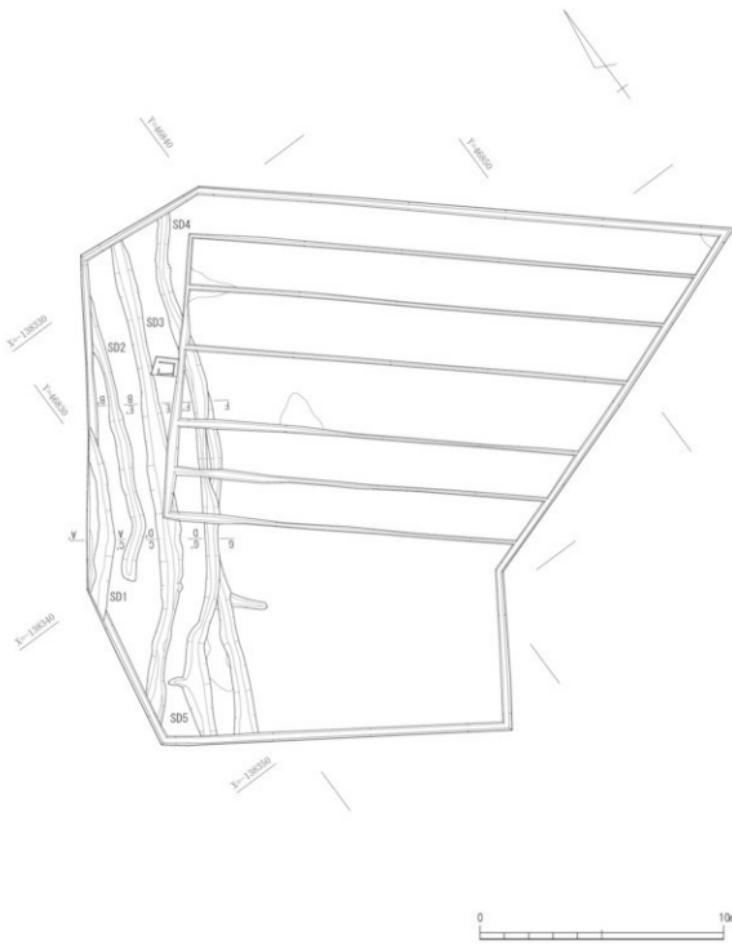
調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 1.0m 前後を測る。断面形は楕底形の落ち込みを見せる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

遺物の出土は見られなかった。

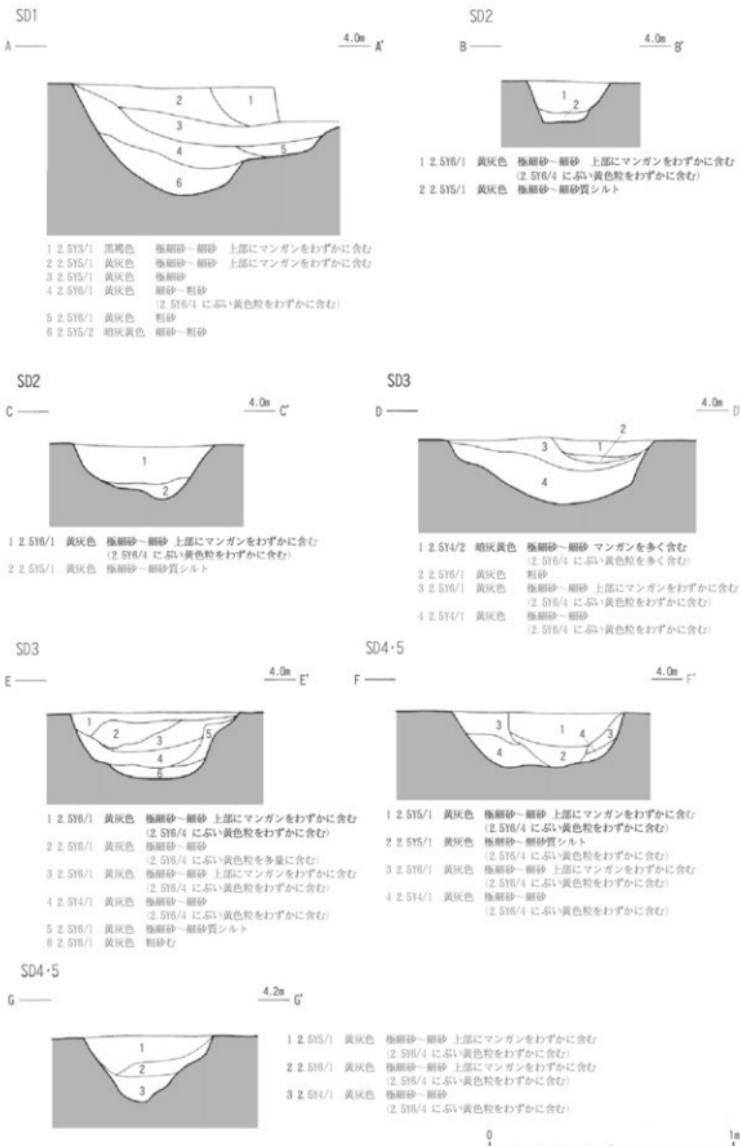
オ SD5

調査区北壁から、緩やかに蛇行しつつ調査区南壁に至る。最大幅 1.0m 前後、深さ 30 cm 前後を測る。断面形は楕底形ないしは V 字形の落ち込みを見せる。溝内はシルト～細砂を主体とする堆積物で自然埋没していた。

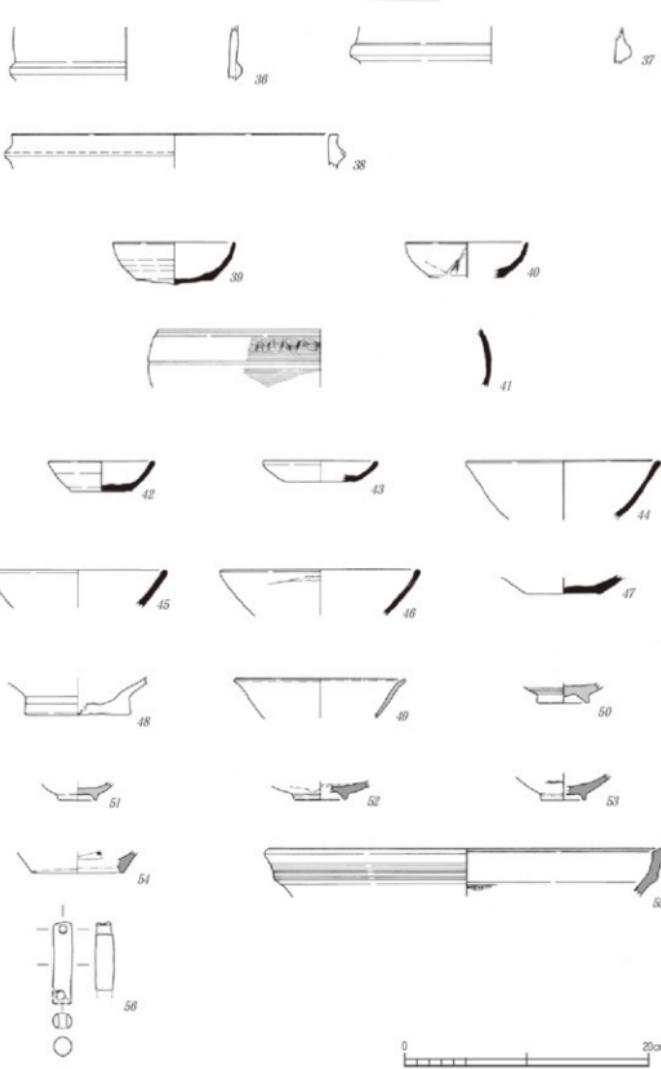
遺物の出土は見られなかった。



第26図 2012年度調査 2区平面図



第27図 SD1～SD5断面図



第28図 2012年度調査 2区出土遺物

(3) 包含層出土の遺物（第28図）

2012年度調査2区では1区と同様、やはりすべての遺物に転磨が認められ、本来の包含層、ないしは遺構から遊離した後、耕作等により摩耗した遺物と思われる。

36・37は円筒埴輪である。やや崩れた断面台形の簾を貼り付ける。38は土師器鍋の口縁部である。口縁直下に突帯を貼り付ける。39・40は須恵器杯、41は須恵器壺の体部である。いずれも古墳時代に属する須恵器である。

42～47は、東播系須恵器である。いずれも中世前半期に属するものであろう。48は土師器托である。平高台をもち、見込み部は一段下がる。49は草南産白磁皿である。外反する口縁部を見せる。13～14世紀の所産であろう。50も中国産の白磁である。断面三角形の輪高台を作る。

51～54は近世の遺物である。51は磁器碗底部である。52は唐津焼皿の底部、53は美濃灰釉陶器碗、54は瀬戸・美濃焼施釉陶器壺である。

55は丹波焼擂鉢である。18世紀後半～19世紀の所産であろう。

56は土師質の土鍤である。円筒形を呈し、両端に孔を設ける。

第4章 自然科学的分析

大塚遺跡の地形環境

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を経て、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

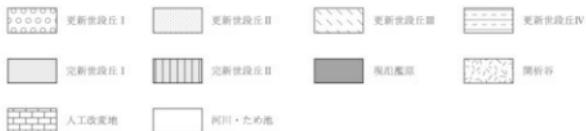
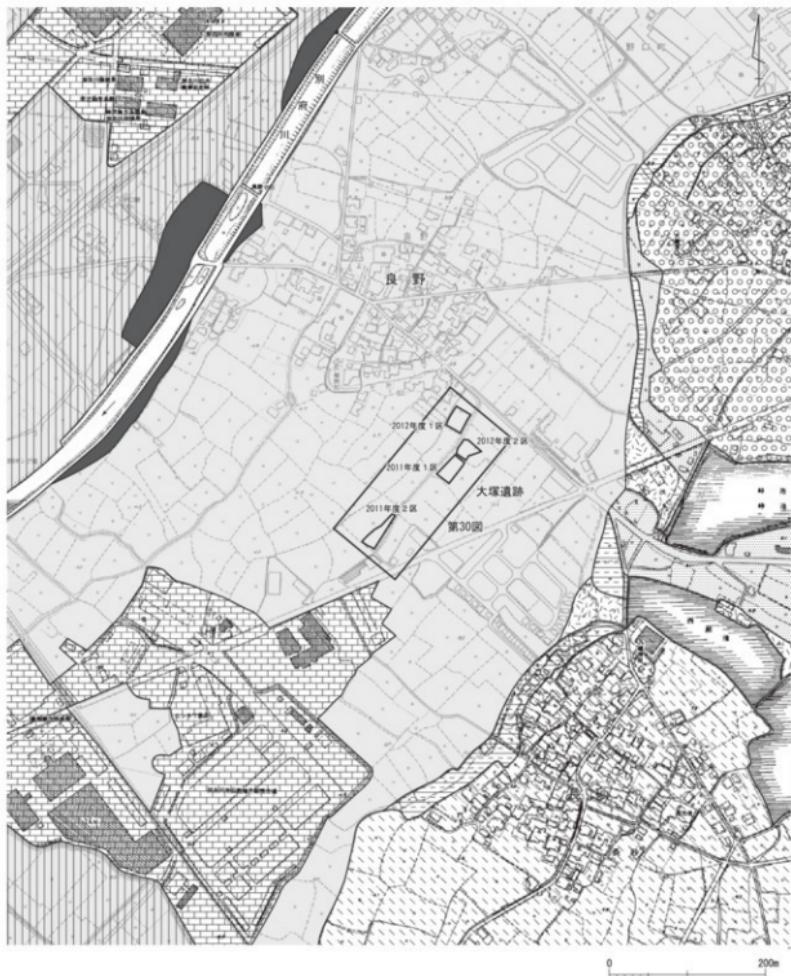
人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。また調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも分析できるのである。

本稿では、大塚遺跡における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。調査では、本遺跡の調査区（2011年度1区と2区、2012年度1区と2区）付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、5,000分の1空中写真の判読と現地踏査によって、調査区周辺の地形面を区分するとともに、調査区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、主に調査区での地質断面を詳細に観察した。堆積物の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、2011年度1区と2区で掘削したトレンチ断面によって遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近の地形環境、及びそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査区周辺の地形分布

（1）調査区周辺の地形について

調査区は加古川下流沖積低地の南東部に位置する。調査区の約350m北西には加古川の分流である別府川が南西へ流れ、およそ200m東には印南野台地が認められる。調査区周辺では、印南野台地の西端がみられ、そこには4面の更新世段丘が発達する。他方、沖積低地には完新世段丘と現氾濫原が認められ、完新世段丘はさらに2面に細分される（第29図）。本稿では、更新世段丘と完新世段丘を高位のものから更新世段丘I・II・III・IV、ならびに完新世段丘I・IIと呼ぶ。調査区周辺に認められる各地形の特



第29図 調査区周辺の地形分類図

徴は次のとおりである。

〔更新世段丘〕調査区の東に分布する更新世段丘は印南野台地の低位段丘に属する。更新世段丘ⅠからⅢは、海成段丘に該当し、現海岸線と同じ北西－南東方向に長く延びる。それぞれの段丘崖は1m前後の比高をもち、段丘面は南西へ階段状に高度を下げる。各段丘の段丘崖下付近には、それに沿って幅30～100mの開析谷が細長く延びる。これらの谷底は完新世段丘Ⅰと傾斜変換線で接する。一方、更新世段丘Ⅳは更新世段丘ⅠからⅢの北西及び西側にみられる。これは、河成段丘であり、加古川や別府川と同じ北東－南西方向に細長く断続的に分布する。段丘崖の比高は約1mである。

〔完新世段丘Ⅰ〕これは別府川の南東側に認められ、そこは加古川下流沖積低地の東端にあたる。段丘面は南西へ高度を下げ、調査区の南西およそ500m付近で完新世段丘Ⅱと傾斜変換線で接する。段丘崖は、調査区より北東で約2mの比高を有するものの、南西に向かってそれを減じ、調査区の西では段丘面が完新世段丘Ⅰより数十cm高いだけとなる。完新世段丘Ⅰには、本遺跡の調査区が位置するほか、北東には坂元遺跡Ⅱの多くと坂元遺跡Ⅲが立地する。坂元遺跡Ⅱの調査区では完新世段丘Ⅰの堆積物上部に黒灰色のシルトがみられ、それは $10,470 \pm 50$ yrBPの年代値³⁾を示す。完新世段丘Ⅰは、この時期から縄文時代晚期までのある時期に段丘化したものであり、その時期は縄文海進頂期直後の海退期と推定されている³⁾。

〔完新世段丘Ⅱ〕この段丘は別府川より西に広がり、加古川下流沖積低地の多くを占める。別府川沿いにみられる段丘崖は比高30～50cmで、段丘面は完新世段丘Ⅰより緩やかな傾斜で南西へ高度を下げる。別府川の支流で、調査区の北東を流れる白ヶ池川沿いでは、坂元遺跡Ⅱの一部が完新世段丘Ⅱに位置する。そこでは、縄文時代晚期の土坑をはじめとする遺構が検出されている³⁾。こうした完新世段丘Ⅱは、完新世段丘Ⅰの段丘化後、2,240年前までに段丘化したものである⁴⁾。

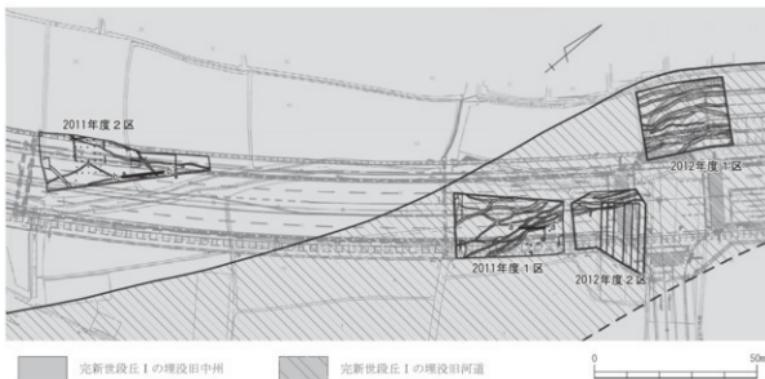
〔現氾濫原〕これは加古川下流沖積低地の中で最も低い地形面に相当する。調査区周辺では、この地形面が別府川に沿って断続的に分布し、発達はあまりよくない。坂元遺跡Ⅱの一部は別府川と白ヶ池川に沿う現氾濫原に位置する。各河川沿いの現氾濫原堆積物に混入する植物遺体からは、それぞれ $2,240 \pm 30$ yrBPならびに $2,030 \pm 30$ yrBPの年代値³⁾が得られている。

(2) 調査区の微地形と遺構について

調査区がみられる完新世段丘Ⅰは埋没した扇状地が段丘化したものである。そのため、完新世段丘Ⅰには扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる(第30図)。調査区付近では、埋没旧中州が東西2か所に分布し、これらはともに北東－南西方向に長く延びる。これらのうち、西にみられる埋没旧中州の末端上に2011年度1区が位置する。この調査区では、主に12世紀末から13世紀前半ころの掘立柱建物跡が1棟とそれより古い時期の溝が数条検出されている。

調査区付近に分布する埋没旧中州の間には、埋没旧河道がほぼ南北に延びる。これは加古川または別府川の流路跡に該当する。埋没旧河道上には、2011年度1区及び2012年度1区と2区が位置し、そこでは複数の土坑や30～40条の小規模な流路跡などが検出されている。これらのうち、流路跡の多くは旧河道とほぼ同じ方向にやや蛇行して延び、その時期は古墳時代までさかのぼる可能性がある。

3. 調査区における堆積物の特徴



第30図 調査区付近における微地形の分布

(1) 埋没旧中州の分布地点について

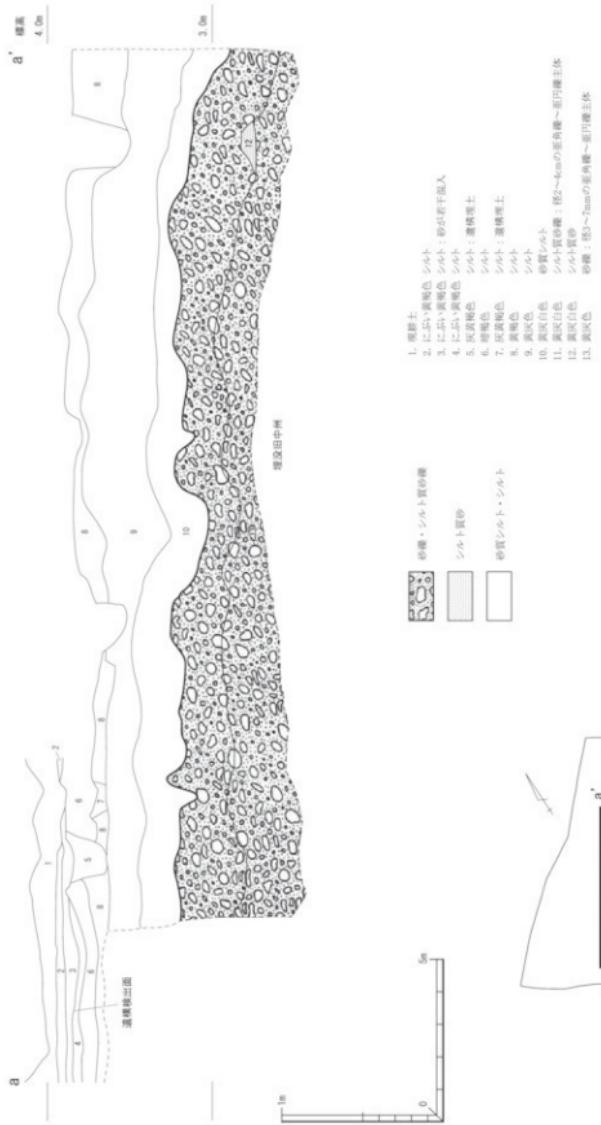
完新世段丘Ⅰの埋没旧中州上に位置する2011年度2区では、砂礫とその上を被覆する細粒堆積物が観察される(第31図)。砂礫は扇状地の旧中州堆積物に相当する。これは黄灰色の砂礫(第31図の堆積物13)と黄灰色のシルト質砂礫(第31図の堆積物11)に分けられ、間には黄灰色のシルト質砂(第31図の堆積物12)がレンズ状に挟まれる。黄灰色の砂礫は径3~7cm、また黄灰色のシルト質砂礫は径2~4cmの亜角礫から亜円礫を主体としており、上位にみられる黄灰色シルト質砂礫の方が細かい礫からなる。これらは現地表下80cm以深に連続して認められ、黄灰色の砂礫は40cm以上、黄灰色のシルト質砂礫は20~40cmの厚さをもつ。

砂礫の上を覆う細粒堆積物は、75cm前後の厚さで、7層(第31図の堆積物2~4・6・8~10)に細分される。これらは黄灰色や黄褐色などを呈し、最下位のものだけが沙質シルト(第31図の堆積物10)で他はシルトである。下部から中部で観察される堆積物(第31図の堆積物6・8~10)は連続性がよく、10~40cmの厚さをもつ。上部にみられるにぶい黄褐色のシルト(第31図の堆積物2~4)は局所的に分布し、厚さが10cm以下である。これらのうち、上部に位置するにぶい黄褐色のシルト(第31図の堆積物3)下面では、12世紀末から13世紀前半ころの掘立柱建物跡や溝などが検出される。なお、完新世段丘Ⅰに位置する坂元遺跡IIの調査区では、このような細粒堆積物の上部にみられる黒灰色のシルトから前述の年代値が得られている。

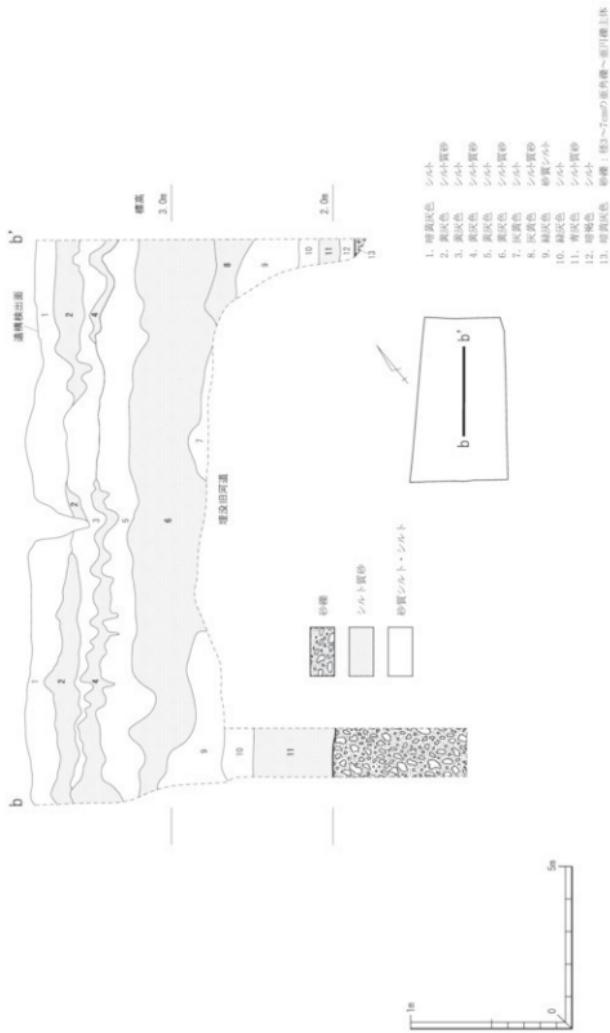
(2) 埋没旧河道の分布地点について

完新世段丘Ⅰの埋没旧河道上に位置する2011年度1区では、砂礫とその上にのる細粒堆積物が認められる(第32図)。砂礫(第32図の堆積物13)は暗黄灰色を呈し、礫は径3~7cmの亜角礫から亜円礫を主体とする。この砂礫は、2011年度2区でみられる扇状地(旧中州)堆積物(第31図の堆積物11・13)に連続すると推定されるものの、旧河道堆積物の下部に相当する可能性がある。

その上位で観察される細粒堆積物はほとんどが旧河道堆積物に該当する。旧河道は少なくとも2m前



第31図 2011年度2区の地質断面図



第32図 2011年度1Kのトレンチ断面図

後の深さをもち、加古川または別府川の流路跡と考えられる。これは、2011年度2区で観察される堆積物のうち旧中州堆積物を覆う細粒堆積物のほとんどを切るものである。ただし、いずれの調査区も埋没旧中州と埋没旧河道の境界に位置していないため、旧河道が切り込む厳密な層位は確認できない。

旧河道堆積物は少なくとも12層に細分される。これらは基本的に緑灰色や黄灰色などを呈するシルト質砂（第32図の堆積物2・4・6・8・11）とシルト（第32図の堆積物1・3・5・7・9・10・12）の互層で、各堆積物は10～50cmの厚さをもつ。旧河道堆積物の中部に位置する黄灰色のシルト質砂（第32図の堆積物6）はとくに厚く、それには細かいレンズ状の砂質シルトが多数観察される。これはシルト質砂が流水の中で堆積したことを物語る。

細粒堆積物の最上部には、暗灰黄色のシルトが10cm前後の厚さで認められる。これは、旧河道を被覆する堆積物と推定され、2011年度2区でみられるにぶい黄褐色のシルト（第31図の堆積物2・3）に連続する可能性がある。シルトの下面からは土坑や數十条の流路跡などが検出される。流路跡の多くは、幅60～90cm、深さ30～50cmの小規模なもので、主に灰黄褐色を呈するシルトに埋積されている。

4. 調査区付近における地形環境の変遷

これまでに述べた事柄からみて、調査区付近の地形環境は次のように変遷したと考えられる。

〔ステージ1〕10,500年前以前、調査区付近には加古川や別府川によって砂礫が堆積した。まず僅の大きい礫を含む砂礫が堆積し、ついでそれより細かい礫からなるシルト質砂礫がそれを覆った。これに伴って扇状地が発達し、2011年度2区付近には中州が形成された。

〔ステージ2〕10,500年前前後には、扇状地の上に洪水が数度及んだ。これによって、砂質シルトやシルトが旧中州を被覆し、扇状地は全体的に埋没した。

〔ステージ3〕扇状地の埋没後、加古川または別府川が2012年度1区から2011年度1区にかけて流れ、そこには流路が形成された。

〔ステージ4〕2012年度1区から2011年度1区に至る流路では、そこを通過した洪水によってシルト質砂とシルトが交互に堆積した。これに伴って、流路は次第に埋積されていった。埋積された流路跡はさらにシルトに覆われ、このシルトは埋没旧中州の末端上に位置する2011年度2区にも堆積した可能性がある。

〔ステージ5〕調査区付近の埋没した扇状地は、縄文海進頂期直後の海退期に加古川や別府川の侵食によって段丘化した。その結果、完新世段丘Iが形成され、段丘面は加古川や別府川の洪水がほとんど及ばない比較的安定した環境となった。

〔ステージ6〕完新世段丘Iより西では、加古川や別府川の堆積作用によって低地が発達した。この低地は2,240年前までに段丘化し、完新世段丘Iより西の広い範囲に完新世段丘IIが形成された。また、これと同時に別府川沿いで断続的に現沼蓋原がつくられた。こうした地形変化の間、完新世段丘Iでは引き続き環境が比較的安定していた。

〔ステージ7〕古墳時代以降、2012年度1区から2011年度1区へ延びる埋没旧河道上では激しい降雨の度に流水がみられた。これらの多くは埋没旧河道をやや蛇行しておおむね南へ流れ、そこには小規模な流路が数多く形成されていった。これらはそれぞれの形成後にシルトによって埋積された。

〔ステージ8〕完新世段丘Iでは、とくに埋没旧中州上で比較的安定した環境が継続していた。12世

紀末から13世紀前半ころになると、埋没旧中州末端上の2011年度2区では人間の居住がみられ、掘立柱建物が建てられた。

5. おわりに

本遺跡の調査区は加古川下流沖積低地の完新世段丘Iに位置する。これは、10,500年前以前に形成・埋没した扇状地が、縄文海進頂期直後の海退に伴って段丘化したものと推定される。調査区付近には、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる。これらのうち、埋没旧中州の末端上には2011年度2区がみられ、埋没旧河道上には2011年度1区ならびに2012年度1区と2区が位置する。

埋没旧中州上の2011年度2区では、12世紀末から13世紀前半ころに掘立柱建物が建てられ、人間が居住した。その大きな原因の一つは地形環境にあると考えられる。埋没旧中州上は埋没旧河道上よりわずかに高く、比較的高燥で排水の便がよい。その上、完新世段丘Iとりわけそこに分布する埋没旧中州上では、数千年間にわたって洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が続いていた。埋没旧中州上では、こうした居住に適する環境がみられたのである。

他方、埋没旧河道上では人間による居住の痕跡が認められず、そこに位置する2011年度1区及び2012年度1区と2区では、古墳時代以降に小規模な流路が数多く形成された。これは、埋没旧河道上がわずかに低いため、降雨などが集水し流れやすいことに起因する。本遺跡の調査区では、以上のような地形環境が認められ、それは人間生活と深く係わっていたのである。

注

- 1) 放射性炭素年代測定値は(株)加速器研究所によるものである。
- 2) 摂稿「坂元遺跡の地形環境」、『坂元遺跡II』(兵庫県教育委員会)所収、2009年
- 3) 兵庫県教育委員会『坂元遺跡II』、2009年
- 4) 前掲2)
- 5) 前掲1)

第5章 結語

今回の本発掘調査区では、属性の異なる2種類の遺構が検出された。主に2011年度調査1区、および2012年度調査区で検出された溝群はきわめて遺物に乏しいが、わずかに出土した遺物は奈良時代もしくは平安時代末～鎌倉時代のものであり、遺構の形成年代も概ねこの間に相当すると思われる。ただし、2011年度1区SD10の埋土上部で検出された炭化物のAMS年代は、較正値で1,754年±24年とされており、これは古墳時代初頭の年代である。この測定値が適正なものとするならば、溝の形成年代幅はさらに広がることになる。2011年度調査2区で検出された掘立柱建物跡およびこれに付随する溝2条は、鎌倉時代に属するものである。

奈良時代～鎌倉時代の溝群については、その数が多いこと、蛇行が顕著であること、出土遺物がきわめて希薄であることなどから、人為的な溝ではなく自然によって形成された流路であった可能性が高いものと推測される。2011年度1区、2012年度1区の状況からは、調査地の北部において、北西～南東方向に頻繁に流路が形成と埋没を繰り返したと考えられる。

しかし溝の一部で見られた、きわめて急斜ながら均整のとれた逆台形状の断面形は（2011年度1区SD17など）、人為の介在を想起させるものもある。すべての溝について、人為が介在したと断定することはできないが、少なくとも一部については自然によって形成された流路に人為が加わった可能性を否定できないだろう。

2011年度2区の掘立柱建物跡は、出土遺物から13世紀代に属すると判断される。遺構の規模などは、当該期における掘立柱建物跡のごく一般的なものであり、農村集落の一部にあたると推測される。しかしながら、今回の調査区内では、他に同時期の遺構を認めないこと、建物跡の柱穴に一切重複が見られないこと、出土遺物がごく少量にとどまること等から、建物は設営された一時期のみに使用され、その後には調査区内は居住地とならなかったと判断してよかろう。

奈良時代～鎌倉時代の遺構の状況からは、いずれの時期においても調査区付近が比較的低温で洪水の影響を受けやすく、居住地として適当とは言えない環境であったと推測される。

一方で、包含層ないしは表土層からは、縄文時代（？）から近世に至る非常に長い期間にわたる遺物が、ごく散漫に出土している。その中で注目されるのは、円筒埴輪である。ごく小型の埴輪であろうが、調査区近辺に埴輪を保有する古墳ないしは埴輪窯が存在した可能性を示している。「大塚」という地名とともに、今後の調査において留意すべき点であろう。

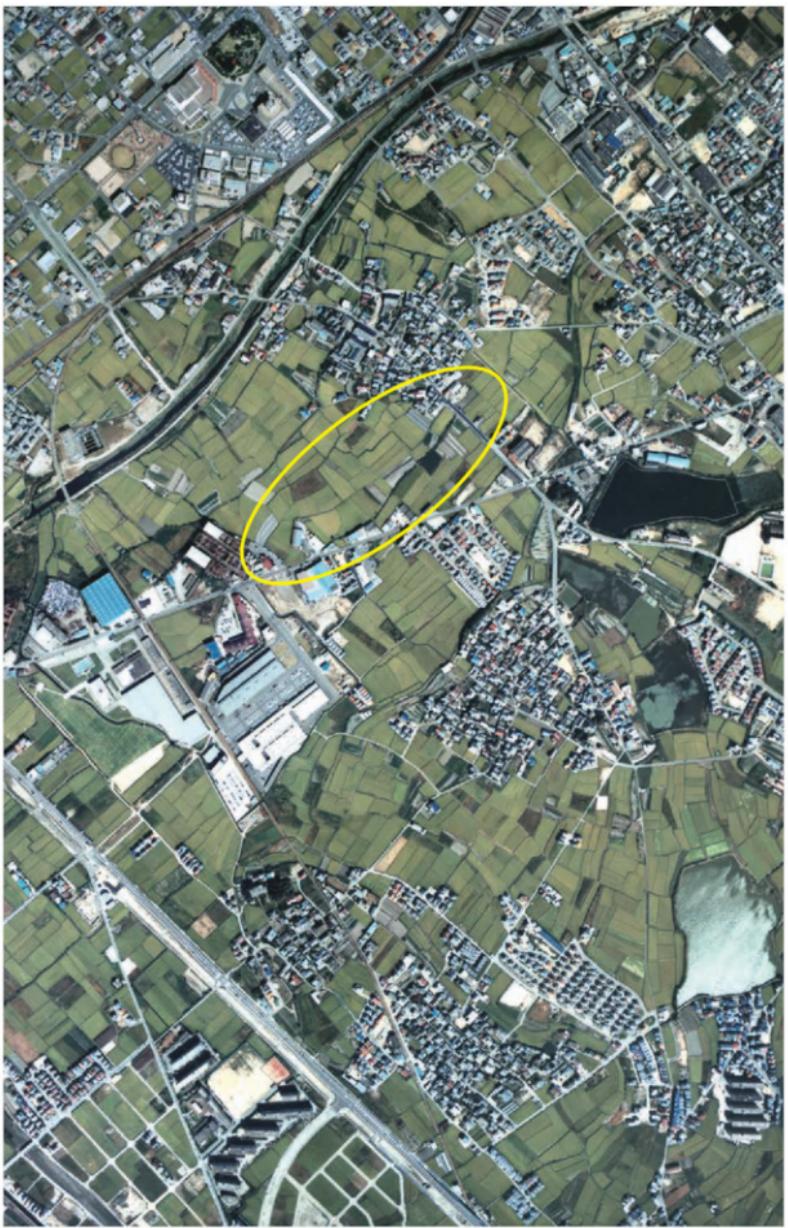
青木哲哉氏による地形形成過程の分析を踏まえると、今回の調査地付近は別府川および加古川の沖積地として、縄文時代初頭に堆積物が形成され、完新世段丘が形成された後、奈良時代に至っても小規模な流路が頻繁に形成と埋没を繰り返していたのであろう。調査地付近におけるこの時期の土地利用は、ごく限的なものにとどまった可能性が高い。その後、鎌倉時代に至るまでの遺構・遺物が見いだされなかつたことは、ほぼ平安時代を通して当地が低温な原野の環境を保っていた可能性を想起させる。

鎌倉時代に至りようやく集落が形成されたものの、その継続期間は短期にとどまり以降はおおむね耕地として利用されたものであろう。

第2表 大塚遺跡収録遺物一覧

報告番号	件名番号	写真図版番号	種別	器種	法量 (cm)				現存 寸総	備考 1	出土地区 遺物	
					寸縦	寸高	腹径	通径				
1	12	26	須恵器	壺	(22.3)	3.7		(19.0)	111/30・底1/8	軽微なし	2011年度10月 SD31	
2	12	26	須恵器	小壺	(8.4)	2.5		(5.4)	111/9・底1/6	軽微なし 不接戻片あり	2011年度10月 SD34	
3	12	26	須恵器	小壺	(11.4)	(3.0)			111/4	軽微なし	2011年度10月 SD38	
4	12	26	須恵器	壺(11縫口)	(11.5)	(3.1)			111/7	軽微なし	2011年度10月 SD41	
5	12	26	須恵器	壺	(14.6)	(3.6)			111/9	軽微をうける	2011年度10月 SD42	
6	12	26	須恵器	壺	(15.6)	(3.9)			111/12	軽微をうける	2011年度10月 SD43	
7	12	26	須恵器	壺	(15.5)	(3.8)			111/15	軽微をうける	2011年度10月 SD44	
8	12	26	須恵器	壺	(15.2)	(3.7)			111/9	軽微をうける	2011年度10月 SD45	
9	12	26	須恵器	小縁	(14.9)	(2.3)			111/9	軽微をうける	2011年度10月 SD46	
10	12	26	須恵器	壺	(27.0)	(3.5)			111/15	軽微をうける	2011年度10月 SD47	
11	12	26	須恵器	壺	(25.2)	(3.1)			111/12	軽微をうける	2011年度10月 SD48	
12	12	26	土師器	小壺	(7.2)	1.1		(5.2)	111/6・底1/6	軽微をうける	2011年度10月 SD49	
13	12	26	土師器	壺(底部)		(1.3)		(7.6)	底1/2	軽微	2011年度10月 SD50	
14	12	26	土師器	空き合せ(底部)		(1.8)		(10.1)	底1/4	軽微をうける	2011年度10月 SD51	
15	12	26	土師器	壺(1縫口)	(27.2)	(4.2)			111/10	軽微をうける No.3～No.2	2011年度10月 SD52	
16	12	26	土師器	鋤釜	(5.1)	最大径 (23.2)			鉢部1/6	軽微をうける	2011年度10月 SD53	
17	12	26	埴輪	円筒	(5.0)	最大径 (26.0)			体部1/3	軽微をうける	2011年度10月 SD54	
18	12	27	青磁	壺(底部)	(2.1)		(5.6)		底1/2弱	軽微をうける 13c.代	2011年度10月 SD55	
19	12	27	白磁	壺	(1.3)		(7.8)		底1/4	軽微をうける	2011年度10月 SD56	
20	12	27	白磁	壺	(2.3)				体部1/9	軽微をうける 河南系 13～14c.	2011年度10月 SD57	
21	12	27	施釉陶器	壺	(12.8)	(2.0)			111/15	軽微をうける	2011年度10月 SD58	
22	12	27	灰陶陶器	壺	(10.3)	1.3		(6.1)	111/2弱	瀬戸? 美濃系灰陶 16c.代	2011年度10月 SD59	
23	18	27	土師器	壺		(2.6)		(8.1)	底1/6	カケン石詰む 軽微をうける	2011年度2月 SD109(12)	
24	18	27	須恵器	壺	(15.5)	4.8		5.8	111/2・底完存	軽微をうける 系切り底	2011年度2月 SD109	
25	18	27	須恵器	壺		(1.8)		6.4	底完存		2011年度2月 SD109	
26	18	27	白磁	壺	(9.7)	(2.8)			111/9	軽微をうける 鶴山窯1面 16c.後半	2011年度2月 SD110	
27	18	27	染付磁器	壺		(3.2)		(4.2)	底1/4・体部若干	18c.後半 くわんか手	2011年度2月 SD111	
28	25	28	罐?	壺		(4.8)			111/2・底部破片	軽微をうける	2012年度10月 SD112	
29	25	28	青瓷上腹	壺	(9.9)	(7.9)			111/8	軽微をうける	2012年度10月 SD113	
30	25	28	埴輪	頭顱		(4.9)	最大径 (18.0)		頭部装備付蓋1/8	軽微をうける	2012年度10月 SD114	
31	25	28	須恵器	小皿	(8.3)	(2.0)			111/2・体部2/7	軽微をうける	2012年度10月 SD115	
32	25	28	須恵器	壺	(31.2)	(2.6)			111/1/6	軽微をうける 近世か?	2012年度10月 SD116	
33	25	28	瓦頂土器	茎葉	頭頂(16.2)	(4.4)	最大径 (21.4)		体部1/8	軽微をうける 近世	2012年度10月 SD117	
34	25	28	無釉陶器	壺	(21.4)	(4.9)			111/10	軽微をうける 信楽か? 近世	2012年度10月 SD118	
35	25	28	染付磁器	盖呑碗		(2.7)		(4.1)	底1/4	軽微をうける プリント 19c.後半	2012年度10月 SD119	
36	28	28	埴輪	円筒	(4.5)	最大径 (19.0)			体部1/4	軽微をうける	2012年度2月 SD120	
37	28	28	埴輪	円筒	(3.1)	最大径 (23.0)			体部1/16	軽微をうける	2012年度2月 SD121	
38	28	28	土師器	壺	(26.5)	(2.9)	最大径 (27.0)		111/13	軽微をうける	2012年度2月 SD122	
39	28	28	須恵器	杯	(9.8)	3.5		(6.4)	111/1弱・底1/4	軽微をうける	2012年度2月 SD123	
40	28	29	須恵器	杯	(9.8)	(2.9)		(6.3)	111/1/4・底1/8	実15と同一個体か?	2012年度2月 SD124	
41	28	29	須恵器	壺		(4.9)			瓶口250	体部1/12	軽微をうける	2012年度2月 SD125
42	28	28	須恵器	壺	(8.4)	2.5		(5.2)	111/3・体部1/3・ 底1/6	軽微をうける	2012年度2月 SD126	
43	28	29	須恵器	小皿	(0.1)	1.8		(5.2)	111/9・底1/4	軽微をうける	2012年度2月 SD127	
44	28	29	須恵器	壺	(15.6)	(4.8)			111/1/4	軽微をうける	2012年度2月 SD128	
45	28	29	須恵器	壺	(14.4)	(3.1)			111/3・体部1/3	軽微をうける	2012年度2月 SD129	
46	28	29	須恵器	壺	(15.5)	(3.8)			111/9	軽微をうける	2012年度2月 SD130	
47	28	29	須恵器	壺		(1.6)		(6.2)	底1/4	軽微をうける	2012年度2月 SD131	
48	28	29	土師器	井		(3.1)		(8.2)	底1/2	軽微をうける	2012年度2月 SD132	
49	28	29	白磁	壺	(13.8)	(3.3)			111/2	軽微をうける 単色窯 13～14c.頭	2012年度2月 SD133	
50	28	29	白磁	壺		(1.6)		(4.3)	底1/4	軽微をうける 中頭割	2012年度2月 SD134	

報告番号	辨認番号	写真図版 番号	種別	部種	法量 (cm)				残存 口径	備考 1	出土地区 遺構
					口径	周長	腹径	底径			
51	28	29	磁器	碗		(1.25)		(3.2)	底 1/4	転轍をうける 近世	2012年度21K
52	28	29	施釉陶器	盤		(1.6)		(4.3)	底 1/4	転轍をうける 唐津 17c.純平	2012年度21K
53	28	29	灰釉陶器	碗(底部)		(2.2)		(3.8)	底 1/4	転轍をうける 美濃灰釉陶器 17c.~(19c.~)	2012年度21K
54	28	29	灰釉陶器	小皿		(1.8)		(7.5)	底 1/6	転轍をうける 湘口美濃 近世	2012年度21K
55	28	29	丹波焼	鉢体	(32.1)	(4.6)			111/24	転轍をうける 18c.純平~19c.	2012年度21K
56	28	29	土器品	有孔土器	長) 6.4+φ	幅) 1.6	厚) 1.5		片側端欠損	転轍をうける	2012年度21K
SI	14	14	チャート	印片	長) 1.98	幅) 1.4	厚) 0.37	重) 0.5g			2011年度11K



大塚遺跡 全景(上空から)

写真図版 2



調査区遠景(南から)



調査区遠景(北から)



2011年度 調査区全景(南から)



2012年度 調査区全景(北から)

写真図版4



2011年度調査 1区全景(北から)



2011年度調査 1区全景(南から)



2011年度調査 I区全景(北から)



I区 北壁断面(南西から)



I区 SD1 北壁断面(南から)



I区 SD1 断面(南から)



I区 SD2 断面(南から)

写真図版 6



1区 SD2-3 北壁断面(南から)



1区 SD2-3 共有断面D-D'(南から)



1区 SD3 断面(南から)



1区 SD4 断面E-E'(南から)



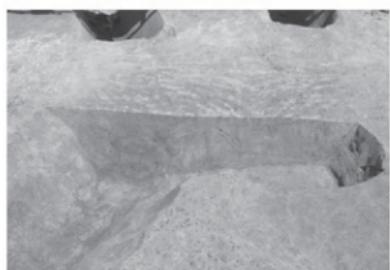
1区 SD4 断面F-F'(南から)



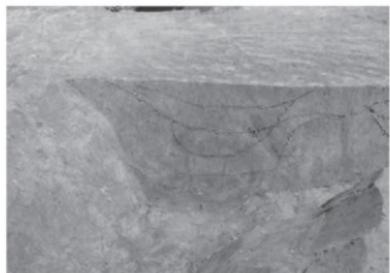
1区 SD4 北壁断面(南から)



1区 SD5 断面G-G'(東から)



1区 SD9-16 共有断面J-J'(南から)



I区 SD9-16 共有断面J-J' (南から)



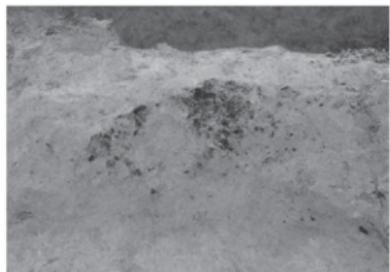
I区 SD9 断面I-I' (南から)



I区 SD10 断面K-K' (南から)



I区 SD10 断面M-M' (南から)



I区 SD10 上層 炭化物集中検出状況 (西から)



I区 SD15 断面O-O' (南から)



I区 SD16 断面P-P' (南から)



I区 SD16 断面Q-Q' (南から)

写真図版 8



I区 SD16 断面S-S' (南から)



I区 SD16 断面R-R' (南から)



I区 SD3・17 共有断面T-T' (南から)



I区 SD18 断面V-V' (南から)



I区 SD18 断面U-U' (南から)



I区 SD18 西壁断面(東から)



I区 SD18 断面(南から)



I区 SD19 断面W-W' (南西から)



1区 SD19 断面X-X' (北から)



1区 SD20 断面Y-Y' (西から)



1区 SK7 断面(東から)



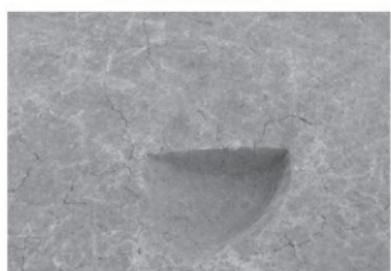
1区 SK8 断面(南から)



1区 SK11 断面(南東から)



1区 SK12 断面(南から)



1区 SK13 断面(南から)



1区 SK14 断面(南から)

写真図版 10



2011年度調査 2区全景(南から)



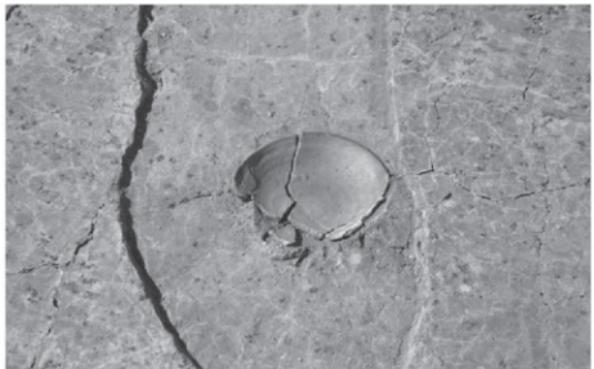
2011年度調査 2区全景(北から)



2区 挖立柱建物跡(東から)



2区 挖立柱建物跡(南から)



SD9 土器出土状況(東から)

写真図版 12



2区 SP11 断面(北から)



2区 SP12 断面(北から)



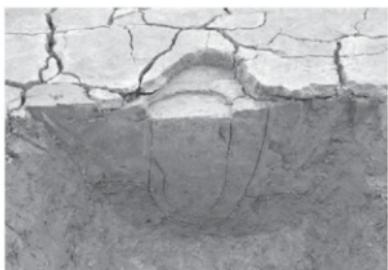
2区 SP13 断面(北から)



2区 SP14 断面(北から)



2区 SP15 断面(北から)



2区 SP16 断面(北から)



2区 SP17 断面(北から)



2区 SP18 断面(北から)



2区 SP19 断面(北から)



2区 SP20 断面(北から)



2区 SP20 碓板(北から)



2区 SP21 断面(北から)



2区 SP22 断面(南から)



2区 SP23 断面(南から)



2区 SP24 断面(南から)



2区 SP26 断面(南から)



2区 SP27 断面(南から)



2区 SP28 断面(南から)



2区 SP28 柱根(南から)



2区 SP29 断面(南から)



2区 SP30 断面(南から)



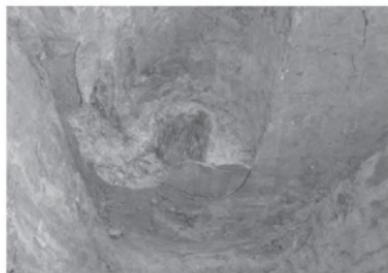
2区 SP31 断面(南から)



2区 SP31 内の隙(南から)



2区 SP32 断面(南から)



2区 SP32 確板(南から)



2区 SP33 断面(南から)



2区 SP34 断面(南から)



2区 SP35 断面(南から)



2区 SP36 断面(南から)



2区 SP37 断面(南から)



2区 SP38 断面(南から)



2区 SP38 内の砾(南から)



2区 SP30 断面(南から)



2区 SD1 断面C-C' (南から)



2区 SD1-3 共有断面D-D' (南西から)



2区 SD1 南半(北東から)



2区 SD5 断面F-F' (南から)



2区 SD5 断面(南から)



2区 SD7 断面G-G' (南から)



2区 SD7 断面(南から)



2区 SD8 断面A-A' (東から)



2区 SD9 断面(東から)



2区 SD40 断面H-H' (南から)



2区 SD41 断面I-I' (南から)



2区 SK2 断面(東から)



2区 SK42 断面(西から)



I区 深掘トレンチ全景(北から)



I区 深掘トレンチ 断面(西から)



I区 深掘トレンチ 断面(西から)



2区 深掘トレンチ全景(北から)



2区 深掘トレンチ断面(東から)



青木哲哉氏調査状況



2012年度調査 1区全景(北から)



2012年度調査 1区全景(北から)



I区 SD1~3(北から)



I区 SD7~10(北から)



I区 SD1 断面A-A' (北から)



I区 SD2 断面(北から)



I区 SD3 断面C-C' (南から)



I区 SD4 断面D-D' (北から)



I区 SD5 断面(北から)



I区 SD5 断面F-F' (北から)



1区 SD6 断面(北から)



1区 調査区東壁(北西から)



1区 調査区南壁(東から)



2区 SD1~5(南から)



2区 SD1~5(北から)



2区 SD1~5(北から)



2区 SD2 断面B-B' SD1 断面A-A'(北から)



2区 SD3 西壁(北から)



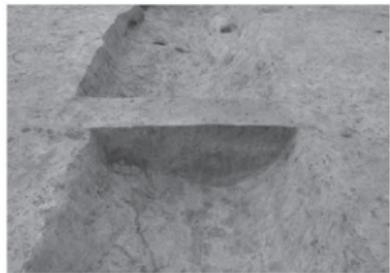
2012年度調査 2区全景(南から)



2012年度調査 2区全景(北から)



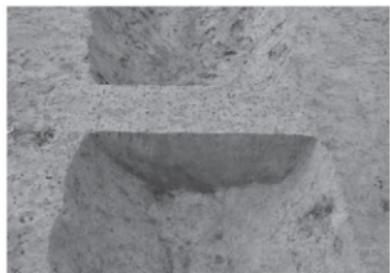
2区 SD2 断面C-C' (北から)



2区 SD3 断面D-D' (北から)



2区 SD3 断面E-E' (北から)



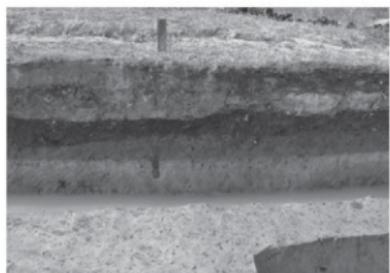
2区 SD4・5 断面F-F' (北から)



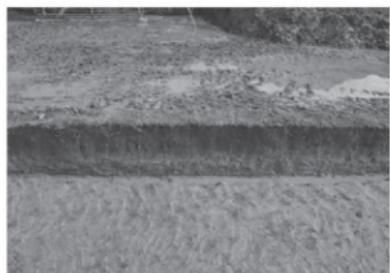
2区 SD4・5 断面G-G' (北から)



2区 調査区西壁 (北から)



2区 調査区南壁 (北から)



2区 調査区北壁 (南から)



2011年度調査区 調査前状況(南から)



2012年度調査区 調査前状況(北から)



2011年度調査区 機械掘削状況



2012年度調査区 機械掘削状況



2011年度調査区 調査状況



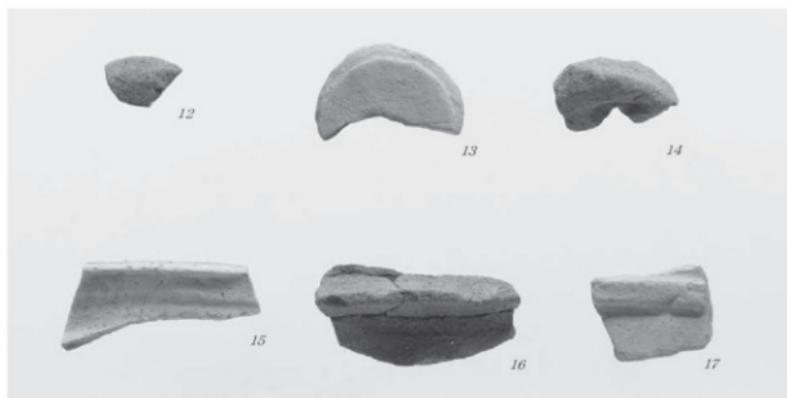
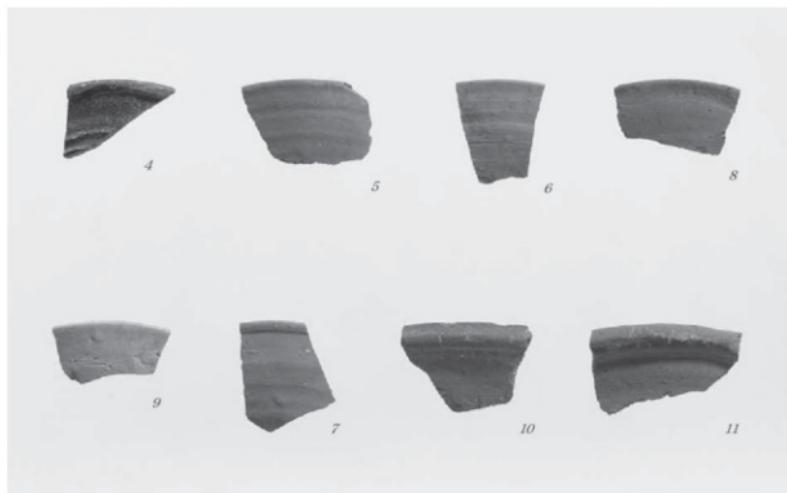
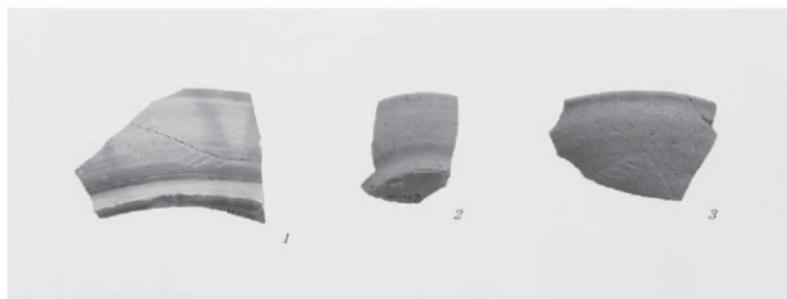
2012年度調査区 調査状況



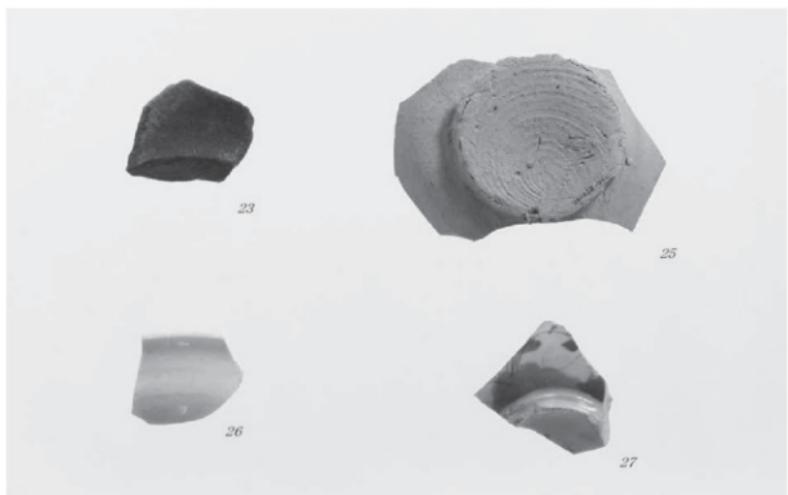
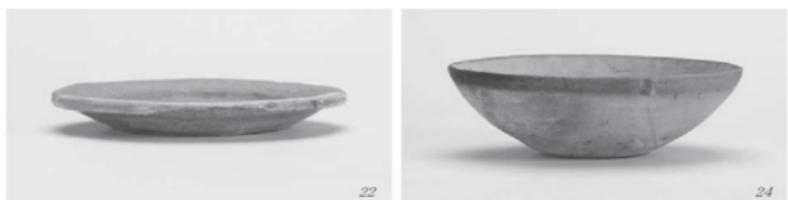
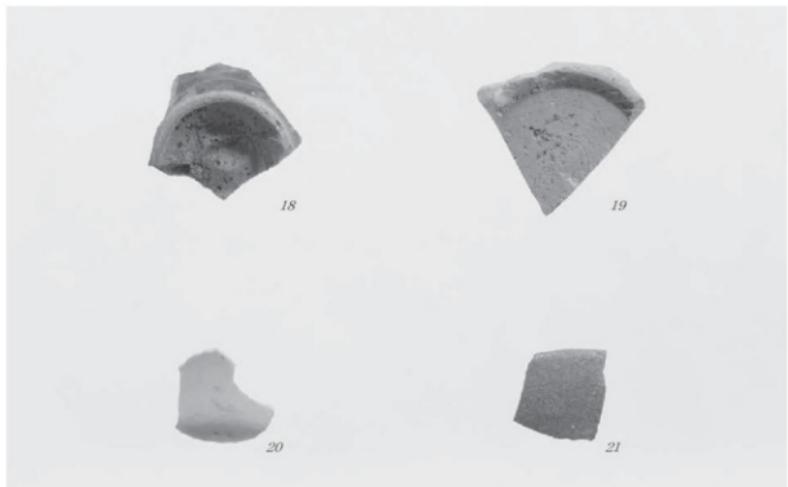
2011年度調査区 固化作業状況



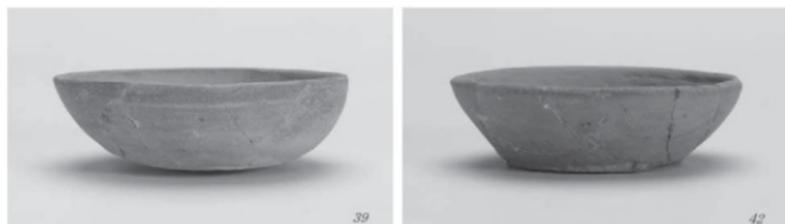
2012年度調査区 調査状況



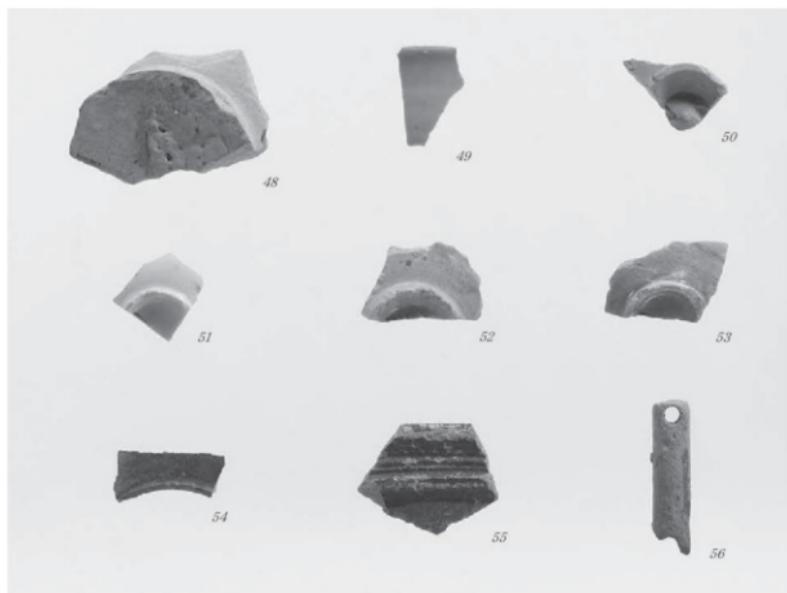
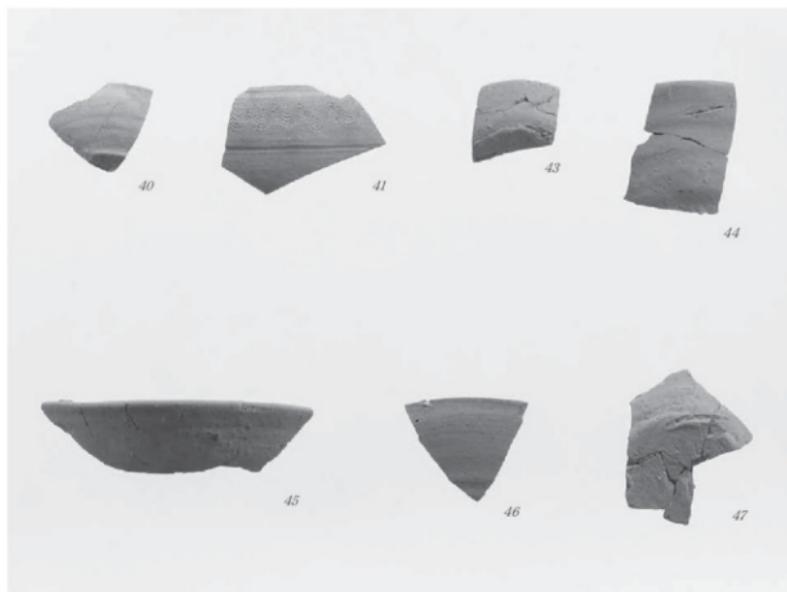
出土土器(1)



出土土器(2)



出土土器(3)



出土土器(4)

報告書抄録 (Outline of the Report)

ふりがな	おおかいせき			About the Report			
書名	大塚遺跡発掘調査報告書			Excavation report of the Ootsuka archaeological site			
副書名	(都)尾上小野線に伴う発掘調査報告書			Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 481			
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第 481 冊			The Author/Editor : Hiroyuki Kubo			
編著者名	久保弘幸						
編集機関	“公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部”			Hyogo Construction Technology Center for Regional Development Archeological Research Department Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan			
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 (兵庫県立考古博物館内) TEL 079-437-5561						
発行機関	兵庫県教育委員会			Hyogo prefectoral Board of Education			
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5-10-1 TEL 078-341-7711			Address : 5-10-1 shimoyamate St., chuo-ku, Kobe, Hyogo pref. Japan			
発行年月日	平成28(2016)年 3月25日			Publication : March 25, 2016			
資料保管機関	兵庫県立考古博物館			Hyogo prefectoral museum of Archaeology			
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 TEL 079-437-5589			Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan			
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経			
大塚遺跡	加古川市野口町良野	市町村	northern latitude	east longitude			
		28210	110641	34° 45' 05"			
				134° 50' 40"			
遺跡調査番号	調査の種別	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因			
2011263	本発掘調査	2011/8/17～2011/10/17	1,136m ²	記録保存調査			
2012116		2013/1/24～2013/3/8	992m ²				
遺跡の種別	集落遺跡	主な遺構	掘立柱建物跡・溝				
遺跡の時代	奈良時代 鎌倉時代	主な遺物	弥生土器・円筒埴輪・須恵器・土師器・陶磁器				
要約	奈良時代～鎌倉時代の溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出された。溝は、おおむね南北方向に延びている、溝内からの出土遺物はきわめて僅少であり、時期の推定には不安を残す。掘立柱建物跡は調査区南部に位置している、総柱式の建物跡である。建物跡に沿った雨落ちと推定される溝から、鎌倉時代の須恵器瓶が出土している。 調査の結果、奈良時代には調査地付近は耕地化されていたと推定された。また、鎌倉時代には集落が成立しているが、遺構密度がごく低いことを考慮するならば、集落の縁辺部に相当するものと思われる。						
Abstract	By this excavation, a ditch of the Nara～Kamakura era, and a Posthole-type building of Kamakura era were detected. As a result of investigation, it was estimated that it was made a cultivated area in the neighborhood of investigation place in the Nara era. In addition, a village is formed in the Kamakura era. Because it is low, as for the remains of an ancient structure density of the excavation range, it is thought that this part is equivalent to the flood relation of the village.						
Address of the site	Noguchi, Kakogawa, Hyogo pref. Japan	Date of the Excavation	2011/8/17～2011/10/17 2013/1/24～2013/3/8				
Category	Settlement, Wetland site	Archaeological Features	Posthole-type building, Pits, Gutters,				
Period	Nara period, Kamakura period	Main Relics	Yayoi pottery, Haniwa, Haji wares, Sue wares, Ceramics				

兵庫県文化財調査報告 第481冊

加古川市

大塚遺跡

—（都）尾上小野線都市計画道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成28（2016）年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

（兵庫県立考古博物館内）

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 クレアチオ

〒672-8071 姫路市飾磨区構4丁目140番地 baseAビル
TEL079-233-9080

月
均
温
距

月
均
温
距
离
数
量
距
离
数
量

平
星
2
年
5
月
1
日

月
均
温
距
离
数
量
距
离
数
量